
呪縛の蛹

想 詩拓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呪縛の蠟

【Nコード】

N0404U

【作者名】

想 詩拓

【あらすじ】

『ある村に蠟人形館があつてね、その蠟人形職人がさ、人間を蠟人形に変える魔術を編み出したんだって。それで、その職人自身も色男だったらしくて、自分に言い寄ってくる村娘を次々と蠟人形に変えちゃったらしいよ。六人ぐらい』

白灯村に伝わる「蠟人形魔術師」の伝説。それは三十年前に実際に起こった連続失踪事件だった。青山千鶴にとって、好奇心の対象でしかなかった事件。だが、この事件は意外に身近にあったもので

……

この謎は村人たちの心を縛る呪縛。解くべきか解かぬべきか。好奇心を超えた決意を持って彼は謎解きに乗り出した。好

00『とあるオカルト系チャットルームの会話ログ』

『蠟人形といえはさ、俺、変な話知ってるよ』

『つーか、変じゃない蠟人形の話なんて聞かないよな、さわやかな蠟人形の話とか想像できん（笑）』

『確かにね（笑）。で？　どんな話なの？』

『創作とかじゃなくてさ、本当にあった話らしいんだけど、ある村に蠟人形館があつてね、その蠟人形職人がさ、人間を蠟人形に変える魔術を編み出したんだつて。それで、その職人自身も色男だつたらしくて、自分に言い寄ってくる村娘を次々と蠟人形に変えちゃつたらしいよ。六人ぐらい』

『そつくりの蠟人形を作つて殺しただけじゃないのか？』

『当時の警察もそう考えて、遺体を捜したらしいけどただの一体も見つからなかつたらしい。今も、その蠟人形館にはその娘達の蠟人形が残されてるんだつてさ』

『へえ、その蠟人形、六体しかないのか？　村にその蠟人形職人が気に入つた娘が六人しかいなかったつてこと？』

『いや、蠟人形は全部で“七体”あるんだ』

『七体？　蠟人形にされた村娘は六人なんだろ？』

『こんなところで勿体振らないでよ。焦らさず話すべし』

『だから、「娘」じゃなかったのさ。その七体目は——その蠟人形職人本人のなんだ。もちろん彼の姿もそれきり消えてこの事件は終わり。それきり進展はない』

『へえ、そりやまた理解に苦しむ話だな。ところでそれ、どこの話なんだ？』

『群馬県だね、もつとも今は例の市町村合併で“村”ではなくなっ
たらしいんだけど——』

01『旧白灯村』

研究室にしては埃っぽさが足りない。

あおやま・ちづる 青山千鶴は、あかばね・としひこ 赤羽俊彦教授の研究室に来るたびにそう思う。整然と並べられた書物は、まあ分らないでもない。自分も本は大きさをそろえて並べておきたい性質だ。

しかし、この部屋の整然清潔さときたら姑が口を挟む隙も見つからないほどで、それにとどまらず壁には小さな絵画が掛けられ、本棚の上などにも上品にインテリアがちりばめられている。

目の前で、前期末試験のレポートに赤ペンを走らせている本人の姿も、シワ一つないスーツにぱりつと糊のりの効いたワイシャツ、その仕種でさえも、無駄ひとつなくびしつと決まっている。

人は、こういう人間を指して“紳士”と呼ぶのだろうが、大学の生徒達はこの教授をそう呼ばない。

(うあー……)

みるみるうちに、レポート用紙が赤ペンで真っ赤にされていく様子を見て、千鶴は内心で呻いた。

赤羽教授に提出したレポート用紙は全て赤ペンによる校正が入って帰ってくる。それがいい加減な気持ちで適当に書いたレポートでさえも本気で校正するので、提出期限前夜に徹夜をし、インターネットからコピー&ペーストで手抜きをしようものなら、たちまち文体の違いを見抜かれて赤ペンが入ってしまう。

だが、適当でも一応の苦勞をして書いたレポートにそこまで細かくダメ出しされて気分を害さない人間はいない。またレポート評価が厳しく単位のとりにくい授業と見れば逃げ腰になる生徒も多く、

赤羽教授の講義を履修するじしゅうのはそれなりに真面目に授業に取り組む根性のある生徒に限られていた。

また、赤羽教授は一種の色覚障害なのか、訂正だけでなく、普通に文字を書くときも赤ペンを使う。それだけならともかく、講義で赤チョークを使うので彼の板書はすこぶる評判が悪い。（字自体はとても綺麗なのだが）

以上の特徴的な行動から、人呼んで“赤ペン先生”。それが“紳士”を差し置いて彼に与えられた称号である。

「これからの休みはどこに出かけられる予定なんですか？ 教授」

評価が終わり、疲労のにじむ吐息と共に渡されたレポート用紙の束をクリアファイルにはさみ、付箋ふせんに日付を書いて貼ると、「返却」と書かれたファイルボックスに収めながら千鶴は聞いた。

この質問は、夏休みに“遊ぶ”予定を尋ねているのではない。生徒への講義以外に研究という大きな仕事のある大学教諭職は、夏期休暇という期間が持つ意味は非常に重要だ。研究によっては長期にわたって現場に滞在して行うものもあるのである。

教授も前期の講義のレポート評価、新学期の講義の準備などで今までの夏休みをつぶしてきたが、まだ夏休みは一ヶ月と半分残されている。

「ああ、盆に一度本宅に戻ってゆっくりした後、インドのほうを見て回ろうかと思っているよ」

教授は東京から少し離れたところに先祖代々住んできた本宅を持

っているらしい。普段は大学に程近いところに別宅としてマンションの部屋から通っている。

「君はどう過ごすのかな？ 大学院行きはもう決まっているし、卒業論文もほぼ完成と見たが」

「あれに関連してちよつと面白い噂をネットで拾ったので、現場に行ってみようかなあ、と思いまして」

「噂？ 蠟人形の？」

赤羽教授の民俗学のゼミで、千鶴は“蠟人形”を取り扱った。蠟人形関連の都市伝説について、それがささやかれた実例と、その原因とされる定説を紹介、もしくは独自の推論を披露し、その共通点を見出しているものだ。

千鶴は学生としては、真面目に研究に取り組むタイプであり、参考書籍もできるだけ一次資料に近いものを選んでいる。

「ええ。群馬の方にある蠟人形館なんですが、車で行けないこともないでしょう？」

「もしか“旧白灯村”のことかな？」

言おうとしていた地名を先に言われ、千鶴は目を丸くした。しかもそんな僻地の名など知るはずがないと思っていたのに。

「インターネットで調べたと言ったね？ ならば私と同じルートで突き当たったのだろう」

千鶴の表情に疑問の色を見て取ったのか、先手をとってそう答える。確かに同じ言葉で検索を掛ければ大抵同じ結果が出る。となると、この話を知っていたとしても不思議はなかった。

「いつ行くつもりかな？」

「できればすぐに。ちょうどお盆ですしー」

「お盆は止めておきたまえ。あそこはお盆の間、出入りを禁止されているからね」

「え？」と、未知の情報に動揺する千鶴に、赤羽教授はさらに説明した。

「白灯村はいつもお盆に白灯祭しらひま祭りというお祭りをやるんだが、そのお祭りの間、外部の人間は中に入れない」

白灯村に続く道は一本なのだが、その一本がその祭りの間、封鎖されてしまうと云うのだ。

「行くなら、お祭りが終わってお盆が明けた後にするのだね」

* *

行くなと言われると、行きたくなる。

「それが人情ってモンでしょうー！」

その主張を掛け声にして、千鶴は丘を越える最後の一步を踏み出した。背中に大荷物を背負って道なき道を踏破するのは正直辛かったが、大学時代を通して登山部に所属し、鍛えてきた健脚にはまだまだ余裕がある。

山に入る道までは、駅からヒッチハイクでやってきた。乗せてくれたトラックの運転手も妙なところで降りるものだ、と怪訝な顔をし、背負っていた大きな背囊はいのうの中身に関心を寄せていた。バラバラ

の死体でも入っているのか、と勘繰^{かんぐ}ったかもしれない。

そこからガードレールを越え、道なき道を踏破^{とうは}して、ここまですり着いたのである。

目的地は村とは言っても、そこまで徹底したド田舎ではない。自動販売機もあるし、二十四時間営業ではないが、コンビニもある。とにかく、まともな道筋をたどれば、バスも通っているのだ。こんな山中を歩いていかなければたどり着けない場所ではないのだ。

では、なぜ千鶴はわざわざこんな面倒なルートを辿っているのかというと、もちろん正面から入る気がなかったからだ。事前に赤羽教授から目的の村が一般人の立入を禁止しているのを聞いたのは大きかった。要するに、千鶴は人目のつかない裏側から村に忍び込むと考えたのである。

千鶴は、背囊の側面についているポケットから水筒を取り出すと蓋^{ふた}を兼ねるカップに麦茶を注ぎ込み、一息つく。そして、胸のポケットからコンパスと地図を取り出し、現在の位置を確認すると、越えた丘の麓^{ふもと}に広がる景観を眺めた。

その視線の先には、彼の目的地、群馬県片品町白灯——通称“旧白灯村”がある。

白灯盆地。それが眼下に広がる地形に与えられた名称である。それは盆地と言うよりすり鉢のようで、そこにあるべき平地は申し訳程度にしかない。

その平地も盆地の五箇所から流れてくる小川が合流して白灯川となり、下流のほうに流れていく。地図に大きな間違いがなければそれを下っていくと片平川へと合流し、やがて利根川にたどり着くはずだ。

その白灯川に沿ってこの村唯一の外部とのつながりである国道が

通っており、それが村の中心へと至っている。そこには村役場と見られる建物や、その他商店などおよそ主要な設備は盆地の真ん中である平地部分に建てられているようだ。

その周りを囲むように段々畑が設けられており、ポツリポツリと農家や住宅地が存在していた。

また、盆地の奥のほうに一つだけ工場のような建物がある。木蠟もくろうの製造所である。実は白灯村は東日本、しかも山奥の群馬には珍しいはせ櫨はせの木の数少ない群生地のひとつで、この村の主産業は和ろうそくなのだ。

そして村の中心に目立っている洋館、それが噂の現場である――

「――白灯村蠟人形館……か」

02『三沢雛子と赤羽教授』

がさがさ、という音を立てて森を抜けた千鶴は、茂みの陰からガードレール越しに昼下がりの住宅地を見やった。住宅地と言うには建物の密集度がかなり低く、ぼつりぼつりと大きめの古びた日本家屋が建てられているだけだ。

見通しはかなりいいが、人影は見受けられない。真つ昼間の今なら家で家事をしているか、あるいは農作業にでも出ているのかもしれない。

この人が出払っている間に、何とかキャンプを張れる場所を見つけた。人を受け付けないなら宿の類も期待できないので、はじめから一週間くらいは滞在できる用意はしてきている。

上から見た限りではキャンプの場所は木蠟製造所の裏手が良さそうだった。近くを小川が流れて水が使えるし、村のほうからは見えづらい形でいい具合に開けている。

あとは何とか蠟人形館に潜入していろいろ調べるだけだ。人の話を聞けないところがどうにもやりにくい、白灯祭というイベントにも何らかの秘密は隠されているはずだ。それを見る価値は絶対にあるし、ひよつとしたら村の人たちの噂話のひとつでも拾えるかもしれない。少なくとも、外部の怪奇ミステリーに染まった人間が勝手に想像力を膨らませて語る噂よりもよほど信憑性は高いだろう。

今いるのは集落の東端。目指すところは村の北東だ。住宅地に人がいるなら外を回りこむつもりだったが、住宅地の中を通っていけばずいぶん距離が短くなる。安全とはいえないが、早く寢床を確保しておきたかったこともあり、千鶴は住宅地をショートカットしていくことにした。

「よいしょつ……と」

ガードレールを乗り越え、道を確認しようと顔を上げたとき、千鶴は凍りついた。

「アンタ、誰？」

目の前にブレザーを着た高校生くらいの少女がいた。何かの運動部に入っているらしく、肩には大きなスポーツバッグが掛けられ、もうひとつ細長い棒状の袋が背負われている。あまり化粧つ気はないが、ポニーテールにほどよく日焼けた顔が健康的だ。

「やー、山歩きをしてたらすっかり遭難してしまつてねー。ここはどこかなー？」

一応、用意をしておいたとぼけ文句を口にするが、彼女はそれを見て睨む視線を強くし、千鶴ににじり寄る。

「この辺に山歩きをするような場所があるなんて聞いたことないわよ！ 初めからここに忍び込むつもりでやってきたんでしょ！？ 時々いるのよね。この時期この村が立ち入り禁止になつてるのを知つてて忍び込むとするデバガメが！」

「出歯亀とはまた古風な言い草だなー……」

「いい！？ あたし達が立ち入り禁止にしてるのはそれなりの理由があるからなの！ あたし、アンタみたいな軽々しく人の思いを踏みにじるようなケーハクな野次馬が一番嫌いなよ！」

男子大学生でも背の高いほうである（が、かわりに細身だが）千鶴に、ここまで強気に出られるとは外見とおりの強気な性格らしい。

これはまたとんでもないのにつかっってしまったようだ。

「分かった、悪かったよー。今日はこれで帰りますって。村の出口どこー？ 国道はすぐ分かるかなー？ じゃ、僕はこれでー。また出直してくるよー」

こうなったら、さっさとこの場から退散するに限る。帰ると見せかけて森に一旦逆戻りし、今度は慎重に外側を通っていこう。ショートカットをするつもりがとんだ回り道になってしまった。

彼女に背を向け、坂を下っていく千鶴だったが、しばらくして後ろからの足音がやまないことに気がついた。ゆっくりと後ろを振り返ると、先ほどの女子高生が彼の後ろからついてきていることに気がついた。

「あれー？ 君の家はこっちなのかなー？」

しかし、この道は先ほど彼女が上ってきた道で、彼女にとっては逆戻りになるはずなのだが。嫌な予感がしたが、目の前の気の強い少女はその期待を裏切らなかった。

「何言ってるのよ。アンタがちゃんと村を出て行くか見届けに行くんじゃない」

どうやらこちらの作戦はお見通しらしい。これはどうしたものか。下の入り口がふさがれているから、遠いところから森に入ったのに、そこを出てしまったら挽回が利かなくなる。

どうやって撒こうか、と思案しながら連行されていると、前方から一人の初老の男性が坂を上がってくるのが見えた。しかも、驚いたことに見覚えのありすぎる人物である。

その男性は俯かせていた頭を上げて、千鶴と目が合うとぴたりと

その動きを止めて固まった。

「青山君！？ どうしてここに……」

「それは僕の質問ですよー、赤羽教授」

その二人のやり取りを聞いた少女は目を丸くして千鶴を振り返る。

「え？ アンタ、オジサマの知り合いなの？」

「オジサマ……？」

よく状況が理解できないが、どうやらここに赤羽教授が現れたことは彼にとって助け舟になるらしかった。

ほどよく緑の生い茂り手入れの行き届いた庭。日のよく当たる縁側。庭の木陰を通り、吹き込んでくる涼風を迎え入れて鳴る風鈴。香る畳の匂い、水滴の浮いた冷たい麦茶のグラス。正しい日本の夏だ、と千鶴は思う。

「……私は“注意”したつもりだったのだけねどね」

反対に煽ることになるとは、と赤羽教授は手元のグラスを傾け、麦茶の氷を鳴らしながら言った。

「教授もここがご実家だっというのを黙ってたじゃないですかー」

話を聞くとところによると、教授が盆に帰るといつていた実家はこの旧白灯村にあったらしい。先祖代々の持ち家であったため、手放すには忍びなく、それならばと職場に近いところに別宅としてマン

シヨンを借り、時々こちらに戻ってくる形にしているわけだ。

「というわけで、オジサマも困ってらっしゃるみたいだし、コレ飲んだら帰りなさいよ」

麦茶を持ってきたお盆を胸に抱えつつ、冷たい視線を送るのは先ほど千鶴を見咎めた少女である。名を三沢雛子^{みさわ・ひなこ}といい、彼女はこの教授の家に住んでいるらしい。

というのも、昔、彼女の家は数年前に失われてしまったらしく、それならば、と普段自宅に戻らず、すでに家族も亡くしていた教授が母屋を提供したのだという。

特に光熱費を除けば家賃は取っていないらしいが、その代わりに留守がちなこの家の管理をしてもらっているらしい。そして離れを自分の書斎にした教授は、帰ってきた際にはそこで過ごしているというわけだ。

オジサマこと赤羽教授のことは、彼女は結構慕っているらしくだったが、千鶴はどうやら歓迎されていない様子だ。オジサマの麦茶にのみ氷を浮かしているくらい露骨な態度の差別化である。

「いやいや、せつかくここまできたんだから、蠟人形館くらい見せてやつてもいいだろう」

初対面の男にまったく遠慮なく冷たい態度を貫く雛子に苦笑しながら赤羽教授は言った。

「でもそれじゃ東京に帰れなくなっちゃいますよ」

「今夜くらい泊めても構わない」からり、と彼はもう一度グラスの中の氷を鳴らす。「……それに、なぜ私たちがこの時期外の人を拒絶するのか、その理由くらいは教えてやつてもいいだろう」

そう続けた赤羽教授の声は何故か沈んで聞こえた。

03 『白灯村蠟人形館』

今の旧白灯村は、主導権が片品町のほうに移ったため、そういった動きはあまり見られないが、昔はどこの村にもあったように村興むらおこし、というものを考えたらしい。

いろいろ話し合いの結果練られた計画の下、少しでもこの村のことを知ってもらおうと、村の主産物である木蠟の関連もあり、見物客を見込んで建てられたのが『白灯村蠟人形館』である。

そう説明する赤羽教授の案内によって辿り着いた木造の洋館を眺めて、千鶴は言った

「……またずいぶんとそれらしい雰囲気ですねー」

遠目には白亜に見えたが、近くによると木造の壁はささくれ立ち、塗装があちこち剥げ、申し合わせたようにツタが絡みつき、古さにむしろ誇りを持った感じすら見受けられる。確かに、ある種の噂が立てられるにふさわしい雰囲気といえた。

近づいていくと一人の老人が、蠟人形館の入り口前をほうきで掃いている。彼も、こちらの気づいたのか、ほうきを動かす手を止め、顔を上げた。

「赤羽君？　いつ帰ったんだ」

「昨日ですよ。お久しぶりです、伊戸部さん」

伊戸部いとべと呼ばれたその老人に、赤羽教授はぺこりとお辞儀をして挨拶をする。

「後ろの雛子ちゃんの隣にいる人は？」と、伊戸部老人は赤羽教授の後ろで立っている千鶴に視線を送って尋ねる。この時期は外部の

人間の立ち入りが制限されているために、ここにはいないはずの、面識のない人物の登場に戸惑っているようだ。

「彼、青山君は私の教え子でして、恥ずかしながら例の噂に引かれて忍び込んできたのです。本来は即刻帰すところなのですが、せっかく来たのですから、教え子のよしみで人形館くらい見学させてやろうかと」

そういうわけで、人形館を開けてもらえないだろうか、と赤羽教授が頼むと、伊戸部老人は答えを渋り、外来である千鶴を怪訝な目つきでしばらく見る。そして、うーん、と唸った後、「……ま、いいでしょう」と、ようやく答えを返し、腰に掛けてある鍵束を赤羽教授に差し出す。

「君なら勝手が分かっていいるだろう？ どうせこの後、中の掃除もするつもりだったから、出るときも鍵は閉めなくてもいい。ただ、帰るときにその鍵をワシに返すのを忘れないようにな」

「ありがとうございます、では」

鍵束を受け取った赤羽教授は、老人に一礼すると、千鶴と雛子をついてくるように手招きをした。

外見はいかにも古く、ほこりっぽい部屋を予想していたのだが、中は意外に清潔に保たれていた。

「それはそうだ。この蠅人形館は今でも普段一般公開しているのだからね」

もつとも、客はほとんど入っていないらしいが、と正直に感想を述べた千鶴に赤羽教授は苦笑して答えつつ、電灯のスイッチを入れ、

洋館の玄関ホールに灯をつける。

窓から入ってくる日光では陰影がきつく、あまり良く分からなかった室内が伝統に照らされたその瞬間、千鶴は思わず息が詰まった。目の前にクラシックないでたちの執事と給仕が立っていたのである。その手前には『いらっしやいませ、白灯村蠟人形館へようこそ』と達筆な楷書体で書かれた手紙が貼り付けられたスタンドが設置されていた。

「ああ、びっくりしたあ。蠟人形だったんだー」
「まるで生きてるみたいでしょ？」

面食らった千鶴の反応を楽しむかのように、雛子は彼の顔を覗き込みながら得意げに言う。

千鶴は蠟人形を実際に見るのが初めてというわけではない。卒業論文で蠟人形を取り扱っただけにいくつか蠟人形館を覗き、その精巧さに目を見張ったものだが、ここにある蠟人形は格が違う。まるで、実際に生きている人間をそのまま固めたような現実感があるのだ。いつ呼吸を始めてもおかしくない。

広い玄関ホールにロープで仕切られた順路に沿っていくと、このような豪華な洋館に住む欧州貴族の生活をテーマに、さまざまな情景が蠟人形で表現されており、それぞれの情景についての説明がそのどれかの人物の台詞として手紙に書かれ、スタンドに貼り付けられていた。

企画自体はありふれたものだが、ポットから紅茶を注がれる瞬間を表現したもの（樹脂か何かで紅茶を表現している）など、芸が非常に細かい。

「これは職人の腕がよほど良かったんだなー」

すっかり感心した様子で言う千鶴を、赤羽教授は「ここはまだ序の口だ」と言つて、階段のほうへと導いていく。

二階の展示部分は、階下とは趣が大幅に違い、生活習慣の紹介というより、彫刻然とした芸術色の強い作品が並んでいる。

まるで泉から上がってきたばかりのように、服ごとずぶぬれになつて絡み合っている『水の滴る男女』、足の方から何か黒い液体に体を絡めとられている男を表現した『黒い衝動の束縛』、被弾して脇腹から出血しているが、木に寄りかかつて安らかな死に顔を見せている兵士『ようやく見つけた安らぎ』。

「こりゃ珍しいねー」

蠟人形は元々、医学研究のために解剖した遺体をそのままの形で蠟製模型として残すために作られたものだ。その後、歴史的に重要な場面を再現したジオラマを作つて展示したのが蠟人形館の始まりで、現代の蠟人形館は、それに加えて有名人や故人を本物そっくりの蠟人形にして展示しているものが人気を博している。

蠟人形、というものは低い温度で溶けるといふ性質が不安定なのか、このように何らかのメッセージをこめた芸術作品としてはほとんど考えられない。蠟人形作りはどちらかというと依頼されたものを黙々と作るような職人芸なのである。

だが目の前にある蠟人形は明らかに“美術作品”として製作されたものだ。千鶴はあまり美術方面に造詣があるほうではなく、美術品としてのこれらの作品の良し悪しは分らないが、たしかに珍しい。

そして、製作者の人格に興味に移つたところで千鶴は思い出した。

「これを作った人が例の蠟人形魔術を？」

「そう、伊戸部礼二、いとべ・れいじという名前の男だ」

「伊戸部？」

というと、先ほど表を掃除していた老人の名前ではなかったか。そういう意味合いでたずね返すと、赤羽教授もそれを察したのか、首を横に振って答えた。

「いや、彼、伊戸部宗太郎氏はその父親だ。この人形館においてある蠟人形を作っていた最初の蠟人形職人でもある。………ついてきたまえ」

教授は半ば言い捨てるようにぼそりと言って、きびすを返すと先ほどの階段を降りていく。

「……………」

千鶴は先ほどから小さな後悔を覚えていた。どうも、自分が蠟人形魔術事件の話題を振ってから、教授の表情が暗い。普段から紳士めいた振る舞いで、温和そのものの教授がここまで心の闇をちらつかせたことがあっただろうか。

ほとんど好奇心だけで首を突っ込んでしまったが、自分は知らずに赤羽教授の心の傷に触れていたのではないだろうか。

ここを見終わった後、本当に赤羽教授が自分に帰ってほしいと願っているなら、本当に帰ろうと千鶴は決めた。

赤羽教授は階段を降りると、先ほどの順路に導く仕切りのロープをはずして、階段の奥に続く廊下に千鶴を案内した。そこは、展示用に装飾されているわけではないため、さきほどとは変わった殺風景さと薄暗さが目立つ。

その廊下の奥にあるドアを教授は開けると、その向こうに現れた階段を一段降りていく。

「薄暗いし、勾配が少し急だ。足元に気をつけたまえ」

教授のその注意どおり、その狭い階段はバリアフリーの精神など欠片も感じられない急勾配で、一段一段が狭く、気を抜くと踏み外してしまいそうだった。

それを抜けると、二十畳程度の広さはある板張りの部屋にたどり着く。薄暗かったので中はあまり見えない。代わりに、この部屋の第一印象を訴えたのは嗅覚だ。鼻腔びようくうをくすぐるこの独特のにおいは間違いなく蝋のものだった。

赤羽教授が真っ暗だった（地下室なので少し地上に出ている上部に申し訳程度につけられた窓から以外、まったく日光が入ってこない）部屋の電灯のスイッチを入れると、部屋の全貌が明かされた。

そこはアトリエだった。二十畳はありそうな広い部屋にさまざまな蝋人形を作る道具が並べられ、そこここに散らばっているのは失敗したのか、腕や足、首といったパーツがあり、立てられたイーゼルの上にはデザイン画が描かれている。

中でも目を引いたのは、部屋の中央に置かれた“六体”の蝋人形だった。これらには何の趣向も凝らさず、かといって一階の蝋人形群のように欧州人を模したものでもない。明らかに日本人であり、格好としては昔の日本では普段着だった袴はかまなどが着せられている。

「これはひよつとして……」

「例の魔術で作られた蝋人形だよ」

教授はその中の一体に歩み寄ると、椅子に腰掛け、肖像画を描く画家に向けたような、少しはにかみを混ぜた微笑を浮かべる女性の顔を覗き込んだ。

その容姿を見た千鶴は、隣にいた雛子と見比べた。その視線に気

づいた雛子はむっ、とした表情を見せて冷たく言った。

「あたしのお母さんのお姉さん。それに——」そして、目を伏せて付け加える。「——オジサマの恋人だった人」

雛子の言葉に、千鶴は弾かれたように赤羽教授に視線を移した。教授は、やや自嘲気味な笑みを返して言った。

「驚いたかな？ 君の聞いた噂の事件、私にとっては君が思うより遥かに近いものだっただ」

04『三十年前』

高野日奈——当時は二十二歳、素朴な可憐さはもとより、よく気がつき、村の誰もが彼女の幸せを願ってやまない器量良しだった。家が近かった赤羽とは幼いころからの付き合いで、その関係はごく自然に恋人同士となる。

そのころの赤羽はすでに大学院生で、大学近くの下宿に一人暮らしをしていたが、長期休暇となれば家に戻っていた。

「俊ちゃんったら、帰ってくるたびに栄養失調になって帰ってくるんだから。お勉強も大切だけど、体を壊したらそれもできなくなるのよ」

講座に入って自分のしたい勉強ができるようになってからというもの、研究にのめりこむあまり、食事をおろそかになりがちだった赤羽が帰ってくるたび、そう言うて腕によりをかけた、栄養たっぷりのご馳走を振舞ってくれたものだ。

高校を卒業した後、地元で働き始めた日奈であるが、このときすでに、赤羽とは博士号を取って講師として働き始めた折には結婚しようという約束をしていたのである。

しかし——それが果たされることは、無かった。

三十年前の夏、盆の白灯祭も間近に迫った8月の半ばだった。

修士論文が佳境を向かえ、夏休みに入ってもなかなか地元に戻らず、やっと実家に戻った赤羽を迎えた日奈の隣に一人の男が立っていた。この田舎には珍しく白い肌をもち、顔立ちが整った、さぞ女達が騒ぎそうな端麗な容姿。

「俊ちゃん、憶えてない？ ほら、伊戸部さんとこの息子さん。中

学までこの村にいた——」

日奈の紹介で、ようやく赤羽はその男のことを思い出した。伊戸部礼二、赤羽と同じ年でこの村の蠟人形館の蠟人形職人をやっている伊戸部宗太郎の息子だ。

親の血筋か、村の中でも抜きん出た器用さと美的感覚を備えており、絵画のコンクールが何かで入賞し、父親以上の蠟人形職人となるべく中学卒業と同時にイタリアに修行に出ていた。

今思えばその年の違和感の始まりはそこからだったはずだ。ところが旧友に会えて、イタリアの様子などを聞いて話が弾んでいたために、それに気づけなかった。

その違和感のはじめて赤羽の心を掠めたのは、帰ってきたその日の夜だった。いつもは、勉強にかまけてきちんと食事をとらない赤羽を叱りつつ、腕を振るってくれる日奈だが、この年に限って叱ることも食事を作ることもしなかったのである。

単に仕事や白灯祭の準備で忙しいのだろう、とこの時の赤羽は結論付けた。今年は帰ってくる時期が時期であっただけに、仕方の無いことだと納得してしまったのだ。

違和感が疑念につながったのは、その年の白灯祭だった。赤羽と日奈は例年通り二人で祭を回っていたが、どうも日奈の様子がおかしい。どこか口数が少ないうえに、時々他の考え事に気をとられているようだ。

どうかしたのか、と聞いても日奈はなんでもない、とその都度苦々しさを帯びた笑みを返し、余計に赤羽の心配を募らせた。

そのときから、赤羽は何かと日奈に対して気を配るように心がけることにしたのだが、肝心の日奈は盆が終わると朝に仕事に出たまま、なかなか帰ってこない。日奈の両親に聞いてみても、このころの帰りの遅さは不可解に感じているだけで、理由などは聞けな

った。

ある日、赤羽は仕事の定刻の少し前から、日奈の仕事場の前を見張っていた。聞けば日奈の仕事はあまり残業がない業態のものらしい。そこで、仕事の後彼女がどこに向かうのか後をつけてみようと思ったのだ。

定刻をすこし過ぎると帰り支度を済ませたらしい日奈が仕事場から出てきた。赤羽は見つからないようにそっと彼女を尾行したが、彼女が歩くのは村に帰る道である。今日は普通に家に帰るつもりなのかと、なおも後を追っていくと、不意に日奈は帰路から外れた。そして彼女がたどり着いたのは、村の蠟人形館だ。

玄関まで着くと、伊戸部礼二が日奈を迎え、二人して中に入る。どくり、と痛みを感じるほど心臓が大きく鼓動したが、おそらく蠟人形か絵かのモデルになっているのだろう。このところ帰りが遅かったのもいつもここに寄っていたからに違いない。そうして無理矢理自分を納得させたが、心の痛みは消えそうにない。

赤羽はこのとき初めて「嫉妬」という感情を実際に抱いた。あまりにも当たり前前に恋人同士になっていたために、今まで危機感など抱いたことが無かったのだが。

ならば、と日奈が出てくるまで待とうとしたのであるが、それは徒労に終わった。運命が彼をあざ笑うがごとく、日奈はその晩に限ってその蠟人形館から出てくることはなかったのである。

激しい落胆が彼を襲っていた。いくらモデルだろうと朝まで付き合うことはないだろう。つまり二人は“そういう関係”である可能性は極めて高い。だが、まだ信じたい。日奈を失うことなど受け入れたくない。彼の人生では女性には彼女だけ、愛する相手も一生で彼女だけだ。失いたくない。失えない。

日奈を問い詰めようか、それとも伊戸部のほうを責めようか。ともかく、ここで静観しているようでは話にならない。

とりあえず、後をつけていたことは伏せて、日奈にタベどこにいたのかを尋ねることにした。しかし、彼女は目をそらしたまま答えるようにならない。そこで、伊戸部の名前を出した。尾行がばれてもいい。はつきりさせようと思った。

伊戸部に気持ちが悪えているのか、と聞くと、日奈は激しく首を振った。

「違う！ 私が好きなのは俊ちゃんだけよ！ それは本当よ……信じて……！」

その激しい否定に安堵を覚えた。嘘ではない。少なくともそう信じていた。では何故、とさらに尋ねようとしたとき、異変は起きた。

日奈の顔は青ざめ、呼吸がし辛いのか胸を押さえて、うずくまる。大丈夫か、と声をかけると、日奈は部屋の隅に置いてある自分の鞆を指差して答えた。

「薬……、薬をとって……」

日奈が病を患っていることに衝撃を受けつつも、鞆をまさぐり、薬らしきものを手にしたそのとき、赤羽を更なる衝撃が襲った。

その薬というのは、注射器とセットになっているものだった。注射器つきの薬などまともな病院や薬屋では処方しない。そして、今の日奈の症状は——まず疑いなく“禁断症状”だ。

結果的に、赤羽はまず落ち着いて話をするためにその薬（おそらく麻薬）を注射してやった。

そして、まず日奈に話したことは、彼女が「薬」と呼んでいるものの正体である。そのときの彼女の表情を見るに、日奈はそれが麻薬であると認識はしていなかったらしい。三十年前のこの片田舎では、麻薬のことなど知らない者がほとんどだったのである。

彼女にこれを与えたのはやはり伊戸部であつたという。精神的にショックを受けていた彼女にこれ以上問い質すのは酷だ、と考えた赤羽は、しばらく耐えれば禁断症状からは抜け出せることを教え、二度と麻薬を摂取するなど言い置いて、彼女の両親に事情を話しに離れた。

ここで、彼女から離れず見守っていれば、彼女は守れたのかもしれない。だが、彼女に対する気遣いよりも伊戸部に対する怒りのほうが大きかった赤羽は、彼女を見守る、という一番大事なことを見逃し、両親に話をしている間に彼女が部屋を抜け出したことにも気づけなかったのである。

日奈の失踪が発覚したのは、その日の夜、日奈の持っていた薬を持って、伊戸部が麻薬を扱っている事を警察に告発しに行った後だった。その際、警察官が気になることを言っていたのである。

「伊戸部礼二か……君、礼を言わせてもらつよ。これで彼に家宅捜査を掛ける口実ができた」

先ほど、日奈の両親に相談した際、去年の秋ごろから次々に村の娘が五人、行方不明になっているという事実を聞いた。村は狭く、消えたどの娘も日奈とは親しかったため、かなり気落ちをしている様子だったと話していた。

その失踪事件が始まった時期と、伊戸部礼二がイタリアから帰ってきた時期と重なるために、警察は彼を疑っていたらしいが、死体も見つからず、また、彼を疑うにも証拠・証言があまりにも少な

つたため、家宅捜査も出来なかったのだという。

姿を消した日奈が伊戸部の元に向かったのは明らかであったため、赤羽は息が切れるのにも気づかない勢いで蠟人形館へと駆けていく。今までの五人の村娘の失踪事件。伊戸部が犯人であった場合、おそらくその五人はもう生きてはいまい、と警察は考察していた。その事実が、焦燥感が彼の体を駆り立てていた。

伊戸部が展示スペースの奥にある階段を下った先にある地下室を作業室として使っていることは知っていた。扉を開け、転がるようにその階段を駆け下りて、赤羽はその場で固まった。

薄暗い電灯の下で、ワイングラスを傾ける伊戸部、その向かいに座っていたのは、赤羽に今まで向けていたものとはまるで性質の違う、よそ向けの微笑を顔に貼り付けた“高野日奈”だった。

「喜ぶがいい。君の愛する彼女が永遠の美を手に入れたことを」

赤羽が突然やってきたことにまるで動じた様子も見せずに伊戸部礼二は言った。

「元々、彼女が余計なことに首を突っ込んでいたのがいけなかった。例の失踪事件を追っていたらしいが、中々手がかりが見つからなくてね、気落ちしていたので、少々薬を分けてやったらいたく気に入ったらしくてね、しょっちゅう相談をしにきてたよ」

何のつもりか、ぺらぺらと上機嫌でしゃべり続ける伊戸部の言葉はほとんど聴いていなかった。

何だ、これは。

薄い微笑を浮かべたまま微動だにしない日奈の向こう側で、同じように椅子に座っている娘が五人。

何だ、これは。

震える足を何とか前に出し、どうにか日奈に歩み寄った。だが、正面で視線を合わせても、まったく反応がない。日奈、と名を呼び恐る恐る、彼女の顔に触れた。

弾力と熱を失った肌——明らかに、人のものではない。

その瞬間、赤羽は悟った。彼の唯一無二の恋人、高野日奈を失ってしまったことを。

「彼女は、君のことばかり話していたよ。さっきここに来たときも、こんな薬に身を汚してしまって、君に申し訳ない、そう言っていた。相当悔しかったんだろうね、君を落胆させてしまったことが。何を思い余ってか、僕に襲い掛かってきたから——蠟人形にしてやった」

全身から力が抜ける心地がした。膝が崩れ、その場に座り込んでしまう。事実を拒絶し、嘘だと自分に言い聞かせることもできない。「心にぽっかり穴が開く」ということを赤羽は身をもって知った。

「何を嘆いている？ 君は彼女を失ったわけじゃない。ここにいるじゃないか」

伊戸部は隣に座る日奈を一瞥して言った。

「むしろ喜んだらどうだ？ どれほど美しくても年をとればやがて

誰もが醜く変わり果ててしまう。だが、こうして蠟人形にすることで永遠の美しさを手に入れることが出来るのだから」

だが、もう日奈は自分に向かって話しかけることはない。体を氣遣い、料理を作ってくれることもない。その空っぽな微笑のまま、豊かに感情表現をすることもない。

「同じ体になれば、永遠に一緒にいられる。彼女が動かないことで嘆くのならば――」

底冷えのする眼を細め、狂気じみた笑みとともに伊戸部が続けた言葉は、耳ではなく心に直接届くような妖しい響きを持っており、今でも録音でもしたかのように脳裏に焼きついている。

—— お前も蠟人形にしてやろうか？

「気がついたら、蠟人形館の外に駆け出していたよ。要するに逃げたんだな。もう動かない彼女からも、得体の知れない伊戸部からも」

彼が、高野日奈を失った翌日、麻薬取締法違反の容疑で家宅搜索令状を持った警官たちが、蠟人形館に踏み込んだが、すでに伊戸部礼二の姿はそこに無かった。その代わりに、鏡で写したかのような伊戸部の蠟人形が残されていたという。

同時に、高野日奈をはじめ、今まで行方不明であった五人の村娘の蠟人形が伊戸部の作業室で発見された。しかしながら、実際の身柄が見つからず、この事件は失踪した娘たちが蠟人形になって帰ってきたという奇怪な事件として、当時はずいぶん話題になったらしい。

その後、“人体を蠟人形にする魔術”を研究していたという伊戸部礼二の手記が見つかり、この村ではこの蠟人形が実際に失踪した娘たちなのだと信じられている。

「だが、魔術や伊戸部などはどうでもいい。あの事件で悔やまれるのは唯一つ——大切な人を守りきれずに失ってしまったことだ」

赤羽教授は三十年たった今でも変わらず微笑み続ける高野日奈の蠟人形の髪を弄びながら、語り終えた。

「……それで、その伊戸部サンの蠟人形はどこにあるんですー？」

しばらくの沈黙の後、千鶴が尋ねた。話には出てきたが、ここにあるのは六人の村娘の蠟人形だけだ。見渡す限り、それらしきものは見当たらない。

「ああ、あの中だ」と、教授が指差したのは、部屋の隅に置かれた長方形の箱だった。確かに一人一人は入りそうだが、よくよく見ると、箱には鎖が巻きつけられ、それが錠前で閉じられている。また、箱の表面にはいくつもの魔術的な文様が施された札が貼り付けられていた。

「やったことがことだからね。村に忌み嫌われて、あんなふうに封印されてしまったんだよ」

封印、恨み、怨念、そういった言葉が不意に脳裏に浮かび、背筋を寒気が走る。この現代にここまでオカルトじみた話が実在していたとは。

「青山君」

不意に名前を呼ばれ、千鶴は「はい？」と返事をしながら赤羽教授の方に向き直った。

「君の探究心は学者として、実に良い資質であるといえるが、ここで一つ忠告をしておこう」

旧白灯村の人たち、特にそこにいる蠟人形の彼女たちの肉親は、ここに彼女たちの姿があり、そして死体が見つからないことで、まだ彼女たちはここにいるという希望を持っている。

いかに千鶴が好奇心に任せて、真実を暴くことは、その希望を打ち壊すことになりかねない。いくら学者でも、人の心の支えを取り払ってしまう権利はない。教授の言いたいことはそういうことだった。

「もし、これ以上この事件について調べたいのなら好きにしまえ。村の人は非協力的だろうが、何とか力を貸してもらえるように、取り計らってもいい。だが、真実を暴きだした後の責任はとる覚悟はしておくように」

その口調はいつもどおり紳士の温和さを持っていた。だが、千鶴にはとても厳しい響きに聞こえた。

05『白灯祭奇譚（しらひまつりきたん）』

赤羽教授は、帰ってきたときには離れの書斎で寝泊りするのだが、食事は雛子たち三沢家と取るようになっていてらしい。とりあえず今夜は教授と一緒に離れに泊まらせてもらうことになったのだが、その流れで千鶴も夕食に呼ばれることになった。

「すみませーん、おかわりお願いできますー？」

千鶴は、空になった茶碗を雛子の母に差し出した。

「あらあら、やっぱり若い男の人は良く食べるのねえ」

「いやあ、普段はそれほど食べないんですけど、お母さんのお料理美味しいんでー」

「つつい、と笑って言う千鶴に雛子の母も悪い気はしないらしく上機嫌で茶碗にご飯をよそう。

「アンタ、他人の家でご馳走になってるんだから、少しは遠慮しようと思わないの!？」

秋刀魚の身を器用にほぐしていた雛子が千鶴をにらみつけると、千鶴は笑顔で味噌汁をすすって答える。

「食べられるときは食べるよー。遠慮しないのが礼儀でしょー？あ、どーも、ありがとございますー」

白米が盛られた茶碗を笑顔で受け取る千鶴に、今度は赤羽教授が話しかける。

「それで、明日はどうするんだね？」

「朝一番で帰ろうかと思えます。まだ色々知りたいことは残っていますけど、教授の行ったとおり、部外者の僕が首を突っ込んでいいところじゃないしー」

好奇心は確かに残しているだろうがさして執着を見せない、という器用な反応を返した千鶴に、熱い茶の入った湯飲みを片手に雛子の父がふむ、と頷いて提案する。

「なら、今夜の白灯祭しらひまつりを見ていったら？ 割と珍しい形の祭りだ。きっと青山君の好奇心も満たされるぞ」

「え？ いいの？ こんな余所者うるつかせて。確か、一日目は手伝いがあるんでしょ？」と、意外そうな声を上げたのは雛子だ。

「でも表が賑やかなのに離れでジツとしているというのも酷だろう。確かに、一人で歩かせば問題はあるが、簡単な話だ。お前も一緒に行けばいい。年頃も近いし、意外と気が合うかも知れんぞ」

「ええっ！？ あたしがあ！？」

聞き返した雛子の顔は、それはそれは不服そうな表情だった。

白灯祭は盆に催されるということからも分かるように、この時期に帰ってくる死者の霊を歓迎する、というのが主な目的の祭である。各自神社で霊を宿らせる媒介となる灯籠を受け取り、故人と過ごした昔を懐かしむように、村中を歩いてまわる『灯籠巡りとうろうめぐり』が主な行事だ。

村の各所には祝い餅や振る舞い酒、菓子類などが配られており、各自それを受け取って帰るスタンプリーのような形式で行事は進む。

「うん、いいねー。こういう純和風な雰囲気は大好きだよー」

配られていた米菓子を食べつつ満足そうに頷く長身細身の大学生を、雛子はじろりと軽くにらむ。

「アンタねえ、あれだけご飯食べておいてまだ食べるの!？」

「育ち盛りだからー、僕」と、身長一八〇、御歳おそらく今年で二十二の男が気楽そうに答え、雛子は盛大にため息をついた。

いちいち間の抜けた口調にはまったく我慢ならない。何故自分がこんな男に付き合わなければならぬのだろ。今年こそオジサマ（赤羽教授）と灯籠めぐりしたかったのに。今頃、親友の篠原美咲は西村勇と仲睦まじく歩いているのだ。先祖様片手にうらやましーもとい、浅ましい。

だが灯籠片手に夜の村を歩くというのは、この長閑さのどかくらいしか取り柄のない村にしては気の利いたロマンチックな行事であることは確かだ。雛子にも恋人がいれば一緒に歩きたい。もっとも、同年代の最近めつきり色気づいてきた男子達とはあまり付き合いたいとは思わないが。

彼らはどうも底が浅すぎ、青すぎる。男はもっと渋く、重く、そして深くあるべきなのだ。

しかし今、隣にしているのは恋人にしたいランキング現在一位のオジサマではなく、今日あったばかりの不法侵入ヘラヘラ男・青山千鶴である。何故、出会う知り合いすべてに「彼氏だ」「男だ」と騒がれなければならず、そのたびにコイツは赤羽教授の教え子云々の説明を繰り返さなければならぬのか。

ちなみに本命のほうは、父母と一緒に祭の運営の手伝いに回ると

かで、今日の灯籠巡りには参加していなかった。

「教授たちはどこで働いているのかなー」

「さあね」

私が聞きたいわよ、という勢いではねつけるように雛子は答える。

「ぜんぜん見かけないし配るお餅とか運ぶ裏方でもやってるんじゃないかしら」

もう何度も灯籠巡りを行っているが、両親および教授は必ずといっていいほど一日目は姿を消す。美咲が近年親友の自分より幼馴染上がりの彼氏をとって一緒に回る相手がいなくなっただけからは、その居場所を突き止めようと探したりもしたのだが、やはり見つからなかった。

灯籠巡りの一番の名所はやはり蛸人形館である。中には入れないが、暗い中、かがり火の揺らめく光に照らし出された古い洋館というだけでもいろいろな意味で凄味のある景観だ。たとえ扉が開いていたとしても、とても足を踏み入れる気にはなれない。

「何か冒険心をかきたてられるね、なんとか中に入れないかなあ？」

同行中のヘラヘラ男と言えば、子供のように灯籠で照らして中をのぞいたり、窓をガタガタ鳴らしたりしているのだが。ただの蛸人形館だし、特に心霊スポットだったり神聖な場所だったりするわけではないのだがなんとなくバチ当たりだ。

「ガキっぽいことしてるんじゃないわよ。ホラ、さっさと行くわよ」

声を掛けるが、千鶴は全く聞いた様子も見せず、館の側面に回ろうとしている。

「ちょ、ちよつとどこに行くつもりよ？」

「いやあ、あの明かり取りの窓はどこかな、と思つてさー」

どうやら夕方、赤羽教授に案内された地下室の窓のことを言っているらしい。あの地下室は上部二十から三十センチほどは地上に出ており、たった一つだけ明かりを取るための窓があった。位置関係からして裏だろうとあたりをつけたのか、千鶴は指して迷うことなく屋敷の裏へと入っていく。

どういつつもりであんなモノを見たがっているのだろう。

勝手な行動をするなら置いていこう、というかむしろこの男から離れるチャンスだ、と思ったのは確かだが、ここで面倒を起こされて後で自分にしっぺ返しがくるのも歓迎できない。

というより正直言つて、若干の好奇心もあつて、雛子は千鶴の後を追つて、蠟人形館の裏手に回る。

「ちよつと待ちなさいよっ」

小走りに追いかけると、千鶴は奥の角を曲がったところでぴたりと足を止めた。それが不意の行動であつたため、雛子は止まりきれずに彼の背中にぶつかってしまった。

「うぶっ……、ちよつと、アンタね、そんなに急に止まることないでしょう!？」

待てと言つておいてなにやら理不尽な文句であると自分でも思つ

だが、千鶴はそんなことは気にした風も見せず、自分の唇に人差し指をあてて、喋らないようにジェスチャーをする。そして、その指である一点を指差した。

その先をたどって視線を移してみると、確かに一点、おかしなところがある。

「……明かりが点いてる？」

千鶴が指差したのは、彼が探していた地下室の窓だった。ただ、予想外だったのが、その窓の中から微かに光が漏れていること。忌まわしい事件の跡が色濃く残る部屋なので、こんな祭りの日でなくともほとんど人は立ち入らないはずなのに。

しかも、ただの明かりではなかった。電灯にしては薄暗く、しかも揺らめいていたのである。

すつ、と千鶴が足を踏み出した。ぜんぜん足音がしなかったら、彼は靴を脱いでいた。近づいて窓をのぞきこんでみるつもりなのだろう。

雛子はホラー映画のように覗き込んだ瞬間、何かに襲われるか、得体の知れない怪人と目が合うような気がして、あまり覗きたいとは思わなかったが、それでも自分の身内に関わる問題である、という事実が見なければならぬ、と己に告げている。

見たくはないが、見なければ気がすまない。雛子は意を決して、千鶴に習い、靴を脱ぎ、持っていた灯籠も地面に置くと、窓に歩み寄った。

「光に当たらないように気を付けてねー。あっちから見えちゃうかもしれないからー」

追いついてきた雛子に、千鶴が小さな声で注意する。なんでこの緊張すべきときまで間の抜けた喋り方をするのか。しかもヘラヘラ男の癖に注意などと年上ぶって。（というか、先ほど靴を脱いだ事といい、そんなノウハウをどこで身に付けてきたのか）何か言い返してやりたい気分になったが、素直な心で見れば彼の言っていることはもつともだったので、何とか衝動を抑えて光を避けるように立つて、中を覗き見る。

そして、見なければ良かった、と雛子は一瞬で後悔した。

儀式——雛子の素人目にはまず、その言葉が脳裏に浮かんだ。

まず目に付くのが、部屋の中央の床に描かれた円形の文様である。魔術儀式などでは良く使われる魔方陣という奴だろう。太く六芒星ろくぼうせいが描かれたそばに細かい文様が付け足されている。

その六芒星の各頂点には、それぞれ件の六体の蠟人形が円の外に正面を向けた形で配置され、その目の前には灯籠が淡い光を放っていた。窓から漏れていた明かりはどうやらこの灯籠だったようだ。

そして、魔方陣の真ん中に、その蠟人形を作った本人である伊戸部礼二の蠟人形が入っている（と、言われている）、お札がたくさん貼られた大きな箱が据えられていた。

また魔方陣を囲むように人影も見える。一人は地下室の奥側に立ち、何やら本を読み上げているようだ。慣れた動作なのか中々堂に入っている。そして残りの十五人近い人々はそれぞれ目の前にある蠟人形に向かって跪ひざまずき、一心不乱に祈りを捧げていた。

雛子が認めたくない事實は、この儀式自体ではない。人影の正体のほうだ。灯籠の頼りない光に照らされて本を読み上げている男は間違いなく伊戸部宗太郎。そして、偶然窓に正面を向けて唯一顔が

判別できた蠟人形“高野日奈”、その正面で祈りに結んだ手を震わせている人物は――

もう何度も灯籠巡りを行っているが、両親および教授は必ずといっていいほど一日目は姿を消す。美咲が近年親友の自分より幼馴染上がりの彼氏をとって一緒に回る相手がいなくなっただけから、その居場所を突き止めようと探したりもしたのだが、やはり見つからなかった。

――ここに、来ていたからだ。

心臓が早鐘を打ち、気の遠くなる思いがした雛子は、窓のそばの壁に背を持たれかけて座り込んだ。

どうすればいいのだろう。ここから乱入でもして儀式の邪魔をするか。それともこの場は見逃して、帰ってきたところを待ち伏せて問い質そうか。

そこで、もう一人そばにすることを思い出した。ふと千鶴がいたところに視線を移すと、彼もまた窓から目を離し、立ち上がっていた。自分が見上げていたのに気づいたのか、彼も雛子に視線を移し、自然と二人の目が合った。

「いやはや、ちょっと覗くだけのつもりがなかなかスゴイもの見ちゃったねー」

口調と表情は変わっていない。いつもと同じ間の抜けた語尾に、へらりと笑った顔。だが、微笑みに細められた目が違っていた。薄暗くて瞳など見えるはずもない。だが、それでもその目には好奇心だけの今までとは違う、明確な意思の光が宿っていた。

その晩、日付が変わってしばらくして離れに教授が帰ってきた時、電灯も消し、千鶴は、彼の為に用意された来客用の布団にすでに横になってはいたが、意識は覚醒したままだった。

「教授？」

まさか、千鶴が起きているとは思っていなかったのか、相当の動揺を見せて彼は千鶴に向き直った。

「青山君、まだ眠っていないかったのかね？ 明日は早いんだろ？」

「教授こそ、こんな遅くまでどこへ行つてたんですかー？」

「ああ、祭の手伝いでね。明日の準備もあつて、こんな時間まで掛かつてしまったよ」

「蠟人形館の地下室でー？」

あらかじめ用意してあつたであろう教授の嘘に、千鶴が真実を知っていることを匂わせると、案の定、教授は激しく動揺したように、暗い中で表情は読めないものの、それでも大きく身じろぎ、しばらく沈黙した。

「……見てしまったのか……“あれ”を……」

「はいー」

返事をする、千鶴はむくりと起き上がり、教授に向かい合つて正座をすると、突然例の間の抜けた口調を忘れたように宣言した。

「というわけで、気が変わりました。帰るつもりだったんですが、僕は明日からも調査を継続しようと思います」

「……好きにしたまえ。私は君の調査に加わる気はないが、できる

「範囲で協力しよう」

そう言って赤羽教授は自分の寢床に入ってしまった。彼の言動を見ていると、どうも千鶴がこの件に関して首を突っ込むことに、あまり賛成ではないらしい。しかし、それでもハッキリと反対をしないのは、その一方で何かを知ってほしい、という気持ちがあるからかもしれない。

どちらであろうと、千鶴のこれからすることに変わりはない。

06『呪縛』

翌朝、朝食の席でもう一泊お世話になることを三沢家の人たちに伝えると、離れに戻った赤羽教授は千鶴と向かい合って座った。

「では、昨日の儀式について話そうか。もっとも君には検討がついているだろうが……」

「蠟人形になってしまった人たちを人間に戻す魔術」、ですよねー」

「そのとおり、“蠟人還し”と私たちは呼んでいる」

少し考えれば分かる。村人はこう信じている。あの六体の蠟人形は魔術によって生身の人間が変えられたものだ、つまりあの蠟人形はいなくなってしまうた村娘たち本人である、と。そして魔術で蠟人形になってしまったのなら、魔術で元に戻すことができる、そう考えてもおかしくない。

「あの魔術儀式ってどこから出てきたんですかー？」

「伊戸部の研究メモが自宅に残されていたそうだ」

人間を蠟人形に変える魔術、蠟人形魔術のうわさが広まったのも、この伊戸部の言動のみではなく、そうした形に残ったものが元になったのだろう。

そのメモには蠟人形から人間に戻すための魔術の記述があったらしい。何のためにはわからないが。

「いつか自分自身も蠟人形になってみたくなったとき、元に戻すための手段がほしかったのかもしれないな」

「でも、何度もやってるんでしょー、”蠟人還し”。なのに全然

元に戻らないんですかー？」

「“蠟人還し”は未完成の段階らしくて、今の状態では成功確率は千分の一らしい。だから何度やっても成功しないし、困ったことに一年に一度しかやってはいけないことになっている」

だから、死者の魂がうつく盆を選んで行っているのだ。

「ふむふむ」と、千鶴は教授が述べていく事実を手早くノートに書き留める。「ま、アレについてはこんなもんかなー」

「これからいろいろ聞いて回るのかね？」

「ええ、そうですよー。まー、教えてくれるとは限りませんけどねー」

元々、この旧白灯村は現在外部のものが立ち入れないことになっている。そのルールを破ってここにいる千鶴は、住人の信頼がまったくないために、行動はかなり制限されるだろう。

覚悟の上だとはいえ、これからする苦勞を思い、のんきそうな笑みに苦味を走らせる千鶴に、教授は封筒を差し出していった。

「君の身元を私が保証すると書いた手紙だ。もし拒否をされてもこれを見せて説得すれば何とかなるだろう」

「え、本当ですかー？」と、ぱつと表情を明るくして千鶴はその手紙を受け取ると、ふつ、と思ったことを聞いてみる。

「教授って、この調査にはあまり賛成してないように見えたんですけどー、急に協力的になったりして、一体どうなって欲しいんですかー？」

教授は数秒間、千鶴と目が合ったまま沈黙していたが、やがて意味深長な笑みを浮かべて答えた。

「知られるのは怖い……が、知って欲しい。それに尽きるよ」

外に出ると、強い日光が千鶴の肌を焼き始めたのを感じた。光にはわずかながら圧力があるというが、夏はそれを実感できる季節だ。紫外線は肌に悪いが、昼間に唯一見える星である太陽の美しさが一番映える夏を、千鶴は気に入っている。

「まずは交番かなー」

三十年前の事件だがまだ当時のことを覚えている警官がいてもいい。

交番の場所はわからないがおそらく村の中央部のどこかにあるだろう。公的機関はすべてそのあたりに集中しているからだ。

時計をみて九時を一、二分過ぎたのを確認すると、目的地を決定し、いざ進もうとしたそのとき、先ほど千鶴も出てきた玄関扉が開く音がした。

「ちょっと待ちなさいよ」

振り返らなくてもこのとげのある口調でわかる。千鶴は肩越しに目をやると、案の定雛子だった。睨み付けるような眼差しで彼の視線を受ける彼女に、千鶴は口元の笑みを深くし、やや嬉しそうに言った。

「来たねー？」

昨夜、あの“儀式”を見た後、雛子に聞かれた。

「……ねえ、どうすればいいと思う？」

あれほどつつけんどんな態度を取っていた相手にそんなことを聞くとは、よほどショックを受けたのだろう。手に持った灯笼の光に照らされた彼女の顔は薄暗くてもはっきり分かるくらいに困惑をあらわにしている。

「そう聞く人は大体、どうしたいか分かってるんだよねー」

「分かったような顔して言わないでくれる！？ どうしたいかなんて関係ない、どうすればいいのか分からないから聞いているのよ！」

いささか捻くれた返答と取ったのだろう、雛子は調子を取り戻したようにキツと千鶴を睨んだ。千鶴はその怒りは全く受け取らずに流すが、視線だけは受け取って合わせると、笑いかけて言った。

「そう、君がどうしたいかなんて関係ないんだよー。そして、君がどうすればいいかも関係ない」

「ど、どういう意味よ？」

意の掴めない言葉に、雛子は少しひるんだように剣幕を引っ込めて聞き返すと、千鶴は相変わらず間の抜けた調子で、だがしっかりとした言葉で答えた。

「僕がやるからー」

しばらくの沈黙の後、雛子は続けて尋ねた。

「……それって蠟人形魔術の秘密を暴くってこと？」

「そっだよー」

「それで、あの蠟人形が日奈伯母さんじゃない、って証明するってこと？ 死体を見つけて？」

「死んだと決まったわけじゃないしー、見つかるって保証もないけどね、最善は尽くすつもりだよー」

「いなくなつた人たちが生きてるって信じてる家族の希望を奪うって言うの？」

赤羽教授が言っていたことを受けて聞いているのだろう。

希望を奪われることは心の支えを失うこと。真実は知られるべきものだとしても、それを貫いてまで人の希望を奪う権利は、千鶴のような好奇心しか持たない部外者には無い。

その問いを受けて千鶴は答えた。

「あれは希望なんかじゃないと思うんだー」

「……どういうこと？」

「どう見ても異常だつたでしょうー？ “あれ”」

伊戸部老が唱える呪文に合わせて、魔方陣にむかつてひれ伏す大人たち。まともな神経でできるものではない。あれはおそらく蠟人形魔術で蠟人形になつてしまった人達を元に戻すための儀式なのだろう。

なぜそんな魔術があるのかは分からないが、それでもあの大人たちは「あの蠟人形はいなくなった娘たち自身である」つまり、「まだ娘たちは死んでいない」ということを信じての行為だ。

それを教授たちは“希望”と呼んでいるが、本当に生きていると信じているならばやらなければならないことがあるはずだ。村娘たちは死体が見つかったわけではない。ただ、拉致されてどこかで生きている可能性もあるのである。

それを探そうともしないで、あんな魔術的なものにとらわれてい

る様は、生きているという希望に縋っているのではなく、生きていると「信じ続けたいだけ」なのではないか。

ならば、それは希望などではない。執着……、その“希望”に捕らえられてしまっているという意味では“呪縛”と言って良いだろう。

「呪縛は心を支えない、ただ縛るだけ。だったら、開放してやるべきなんじゃないかなー？」

「で、でも！ 真実を知った事でなにかが壊れちゃったら……！？」

あの儀式にさえ目をつむれば、この旧白灯村は全くの平和なのだ。人口が少なく、住人全員が知り合いのこの状況を下手にいじれば全体がギクシャクしてしまうことになる。

「それなんだけどねー、一応真相は調べておこうと思うんだー。君は事件の関係者と関係が近いわりに事件との関わりは薄いしねー、真実を知った後でこれを公表するかどうか決めるのは君が一番最適だと思うんだー」

でねー、と千鶴は続けた。

「よかつたら一緒に調べないー？」

「え？ な、何で？」

何でアンタなんかと、というより、邪険に扱っているはずの千鶴が誘ってきたことに驚いているらしい。

「結果だけ聞いてもあんまり分かんないかもしれないからさー。調べる過程から見れば、本当に理解できるんじゃないかなー、と思っ

て」

千鶴の提案と考えに、雛子は言葉を返すこともなく目の前で考え込み始めた。好奇心や責任感、恐れ、そういった感情が複雑に彼女を板ばさみにし、葛藤させている様子が見て取れる。

だから言った。

「どのみち調査を始められるのは明日からだから、今夜ゆっくり考えてみて。もしOKなら朝九時にここにきてくれればいいからね」

そして雛子は現れた。若干の遅刻はギリギリまで悩んでいたからだろう。おそらく窓あたりから千鶴が出かけるのをみて慌てて追って来たに違いない。

「協力してくれるんだー？」

「……自分の中でもややもやしているのが嫌なだけよ」

そう、雛子は今までと変わらずつつけんどんに答えるが、そんなに毛嫌いしている相手の言葉でもちゃんと聞いて受け入れられる素直さは好ましい、と千鶴は思った。

「どっちにしるありがたいよー。僕、この村のことあんまり知らないからさー」

それがはじめに交番を選んだ理由であつたりする。狭い地域とはいえ、千鶴にはこの地域の土地勘がない。それが、一番初めに交番を選んだ理由だ。ここならこれから回ろうと思っていたところ全てを聞いて把握できる。

だが、人間関係をはじめ、裏にある事情というものはそこに長期間住んでいないと分らない。これから話を聴きに行く人たちも、見知った雛子と一緒にいるほうが口も柔らかくなるだろう。

「で、どこから行くつもり？」

「交番かなー。事件当時の捜査資料とか残ってるかもしれないしー」

こうして、千鶴と雛子による蠟人形魔術の謎への挑戦が始まった。

三十年前、伊戸部礼二が何をしたのか？ 何がしたかったのか？
蠟人形魔術の真相は？

蠟人形の代わりに消えた伊戸部礼二と六人の娘たちの行方は？

やるべきこと、解くべき謎は山積している。

07『蠟人形魔術失踪事件——とある警官の捜査ノートより』

「おつ、雛子じゃん。久しぶり」

交番に行くとい人暇そうに書類に目を通していた若い制服警官が親しげに声をかけてきた。年齢的には千鶴と同じか少し上くらいだろう。まだ配備されたばかりに違いないが、この馴染なじみようからしてこの村出身なのかもしれない。

「おめー、昨日の灯笼とうちゅう巡り、オトコと歩いてたんだって？ 学生連中が騒いでたぞ。男嫌いの雛子がムコを連れてきたって」

「なんでそういう部分だけ広まるのよ。教授の客を案内してただけだって何度も言ったのに。しかも何よ婿むこって！ どれだけ話が飛躍してるのよ!？」

雛子は不満そうに口を尖らせるが、噂とはえてして面白い事実のみ誇張されて広がるものである。というか男嫌いの方は否定しないのだろうか。

「おっ？ 後ろのヤツが噂の婿か？」

「青山千鶴ですー。今日はちよつとおまわりさんにお願ねがいがありましたー」と、千鶴はとりあえず挨拶をした。

「ちゃんと否定しなさいよッ！」

雛子から抗議の声が上がる。

「でも、別に噂だけなら放っておいてもいいんじゃないー？ 別に君が責任とって僕と結婚しなきゃいけないんなら別だけどー」

間の抜けた口調ではあるが、割と説得力のある意見に、雛子はなるほど、と納得した様子を見せた。

「へえ、雛子を黙らせたよ。たいしたヤツだね、兄ちゃん。俺はこの村出身で警官をやってる井上丈^{いのうえ・じょう}つてんだ。今年この交番に配備されたばっかで、階級は巡査。……で、お願いって何だ？」

客だというのに、丁寧語の欠片すら見えない井上の対応だが、特に見下しているわけでもなく、親しみのこもった口調であったため、不思議と不快感は沸かなかった。

「蠟人形魔術の事件、知ってますー？」

「へえ、あの事件かい。この村でその話を知らねえやつはモグリだ。もつとも、俺らの世代の半分は本当にあつたかどうかも疑わしいと思ってるがね」

「僕、その真相を調べてるんですよ。で、その捜査資料がなんかあつたら見せていただけないかと思ひましてー」

その言葉に、年若い警官は「へえ」と目を見開いて言った。

「本気かい？」

こくり、と笑って頷く。同時に、雛子も神妙な顔で頷いたのをみて、井上はもう一度「へえ！」と、感心した様子を見せた。

「でも、ああいう大きい事件はフツー県警のほうで取り扱うから、ここに資料はないぞ。あつても内部資料だからな、どのみち見せることもできねえし」

「あらー、そうですかー……」

千鶴は口調こそ残念そうだったが、さしてショックは受けていない。そんなもんだろうと考え、さほど期待もしていなかったからだ。ひよっとしたら生き字引のような警官が残ってて、当時のことを覚えていないだろうかとも期待したが目の前の新人警官じゃ、まだ生まれてもいなかっただろう。

隣の雛子はというと、結構な期待を抱いていたらしく、目に見えるほどに落胆している。しかし一瞬でその落胆を吹き飛ばすと、くるりと踵を返し、千鶴の袖を引つ張っていった。

「仕方がない。次に行くわよ」
「待て」

立ち去ろうとした雛子と千鶴を井上は後ろから呼び止めた。

「俺は『フツーはない』って言ったただけだぜ？」
「……ってことはあるんですかー？」

千鶴が振り返って聞くと、井上は「ちょっと待ってる」と、言って交番の棚にあるダンボールをあさり始めた。

「その頃、親父が俺と同じように新人でここの交番勤務に回されてたんだよ、そしたらあの大事件だろー？ 事件捜査は警官の夢だからな、解決に燃えちゃったらしくて、休日に時間を割いて独自に聞き込みやら現場検証やらをやったらしいんだ。その記録用のノートが確かこの辺に……お、あったあった」

ダンボールの中の荷物（大半がノートなどの書類だった）のほとんどもを横に積んだところで一冊の古びたノートを取り出した井上が、それを千鶴に差し出す。

「ほい」

「……原本そのまま渡しちゃうんですかー？」

「雛子経由でいいからあとでちゃんと返してくれよ。なんたって親父の青春なんだから」

あっさり手渡されたノートに目を落とし、珍しく千鶴が驚きを見せるが、井上のその返答もかなりあっさりとしていた。

「そんなのがあるんならさっさと出し——むー、むー！」

からかったことに対し、井上に言い募ろうとした雛子の口を千鶴が押さえて礼を言った。

「ありがとうございます！。お父さんにも是非お礼を言っておいてくださいねー」

「ああ。その代わり、謎が分かったら教えてくれよ。俺も気になってしかたねえし、親父にも教えてやりたいからな」

「はい、必ずー」

そのまま、千鶴は、その腕の中でもがいている雛子を引きずるようにして交番から離れていった。

「ちょっと、何で止めるのよ！ それにあればセクハラよ」

「いや、親切で出してくれたのに文句行ったら悪いでしょー？ せっかくノートが見られるのに引っ込められちゃったらこっちが困るんだからさー」

うつ、と雛子は言葉を詰まらせる。しかし、どこか子供を諭すよ
うな千鶴の口調が気に入らないのか、それに加えて相手が間の抜け
たイメージのある千鶴だったということもあるだろうが、不満そう
な顔でうつむいてしまう。

微笑ましい雛子の反応を横目に、千鶴は先ほど渡されたノートを
開いてみた。

さすがに地元というだけあって、容疑者・伊戸部を中心とした相
関図などは、県警の本物の捜査資料よりも詳しいのではないだろう
か。証言も当時の村人すべてから取ったのかと思われるくらい、た
くさん書き込まれており、噂レベルにいたることまで書き込まれて
いた。

そのせいで多少考察の部分はその噂に振り回されているようでは
あったが。

この、『蠟人形魔術失踪事件』と名づけられた（実際の警察はこ
んな幻想的な名前をつけるはずがないので、これを書いた井上の父
親が勝手な呼称だろう）タイトルが書かれているノートの概要は以
下のとおりだった。

まず、事件の始まりは一件の村娘の失踪事件から始まったらしい。
三十年前の一月八日、松も明け、新年の祝いムードも抜けたころ、
一人の村娘がいなくなってしまった、との通報が交番に入った。

その娘、やました・たえこ山下妙子は十八歳で高校卒業を控えており、また本人は
就職の折、上京希望だったが、その両親は反対していたという事情
から家出と処理され、東京のほうに搜索願が送られて事件は決着し
た。

そして二月七日、また一人の村娘が行方不明になる。かつら・みさと桂美里、二
十三歳でこういった村には珍しく、その年齢でまだ独身であった。

早くに病気で母親を亡くし、また父親も病床に臥せ^ふってしまったため、仕事と看病の毎日に追われて、結婚どころではなかったらしい。彼女の場合、仮定でのトラブルもなく、また看病に疲れた様子もみせていなかったため、何の前触れのない形での失踪となった。警察としても事故で川にでも落ちたのでは、と周囲を聞き込み、最後の目撃地点から川の搜索などを行ったが、ついに見つかることはなかった。

さらに三月九日、今度は駆け落ちと思われる失踪事件がおきた。
かわぐち・ともみ
川口智美・二十歳が、「恋人と旅行にいつてくる」という書置きを残し、以降帰らなかったという事件だ。

奇妙なのはその前に彼女に男と付き合っていた気配がまったくなかったことと、付き合っていたとしても、特に相手が外部の人間であつても反対をするつもりはなかった、と両親が話していることだ。また、そこまであからさまに駆け落ちをしておいていまさる「旅行だ」と嘘をついている点も妙であつたが、結局ただの駆け落ちということで処理され、あまり重く受け止められなかったようである。

次に失踪事件が起こつたのは四月十七日、失踪したのは加村英子^{かむら・えいこ}十九歳。高校卒業後、この村の木蠟作りの会社に就職したばかりで、まだ研修期間が始まつたばかりだった。整つた容姿が評判の娘だったらしく、当時の上司がしつこく言い寄って困っていた、という記録がある。

それがついにトラブルにまで発展する。上司のセクハラ行為がさらにエスカレートし、彼女が工作中に逃げ出したのである。当時セクハラという概念はなかったが、それでも悪質であると判断され、その上司を処分する決定を下し、加村英子を探したが彼女の姿は村から消えてしまっていた。列車を使うなど村から出た様子がなかったことから、自殺行為に及んだのではないかという噂も立ったという。

五つ目の失踪は六月二日。伊藤夕菜^{いと・ゆうな}二十一歳。山菜を取りに森に入ってから行方がわからなくなった。

失踪した六人の娘の中では唯一既婚である。ただ、夫がストレスを溜めやすい性格だったらしく、アルコールに逃げた結果、妻である夕菜に暴力を振るうようになり、そのことを友人に相談したりもしている。

村ではこんなに短期間に五人もの村娘が失踪するなど前代未聞で、神隠しか何かじゃないか、とそれなりに騒ぎになっていたのだが、この五つの事件は当初全く別々に取り扱われていた。今述べたとおり、五人の失踪には五人ともうら若い娘であるということ以外は共通点が見出せなかったからだ。

それが結びついたのが六人目の失踪者・高野日奈の事件だった。警察はこれとは別に捜査していた麻薬密輸に関して調査しており、この事件の容疑者が伊戸部礼二であった。高野日奈の事件で、家宅捜索の許可が下り、そこで見つけたのが先に失踪していた五人の娘たちの蠟人形であった。

この事実を受け、警察は高野日奈も含めた六人の娘の失踪事件を一つの事件として扱い、本格的に本部を組んで捜査した。テレビでもこの不可思議な事件にスポットを当て特番が放送され、その捜査は全国に及んだが、結局一人も見つからないまま迷宮入りし、捜査本部は解体された。

「伊戸部礼二についての証言はあまり多くない。子供のころは芸術性の高い子供として、村から著名人が出るのでは、と期待されていたが、イタリア留学で村を空けているうちに、彼のことを忘れてしまっていた者もいた。」

帰ってきて積極的に挨拶回りするでもなく、蠟人形館のアトリエにこもったまま、まったく出てこない様子だったため、この狭い村でもイタリヤから帰ってきたあとに彼に接触した人数は少ない』、
だつてさー」

「普通、帰ってきたらみんなに会えて嬉しいから会いに行くんじゃない？ 何のために帰ってきたのかしら」

千鶴が読み上げたノートの内容を聞いた雛子の疑問はなかなか核をついている。どのみちアトリエに引きこもるなら、わざわざ白灯村に戻ってくる意味はないのだ。蠟人形館を継ぐにしても伊戸部老もそのころはまだ若かっただろうし、特に急ぐ理由もなかった。

村のほうで伊戸部礼二を必要としたわけではない。“伊戸部礼二が村を必要とした”のだ。

08 『蠟人形魔術師の部屋』

洋館という分類上、蠟人形館の一角の雰囲気は日本のものとは違った雰囲気がある。そのためか、気のせいであろうが、歩いてくる途中ではあれだけうるさかったセミの声も館が近づくにつれて小さくなる。昨夜、蠟人還しを見てしまった千鶴や雛子の目にはいかにも妖しい雰囲気とかもし出しているように思えた。

そう、交番の次に彼らが向かったのは蠟人形館だった。事件の中心人物である伊戸部礼二、そして現場ともいえる蠟人形館を調べなおすことはこの調査には必要なことだ。

洋館の前では伊戸部礼二の父親である老人・伊戸部宗太郎が昨夜の灯籠巡りで洋館を照らし出していたかがり火の台を点検していた。足音が聞こえたのか、ある程度近づくと二人の存在に気付いた様子を見せて、その手を止める。

「おはようございますー」

千鶴が挨拶をすると伊戸部老は「ああ」と返事を返す。しかし、表情をわずかに曇らせる。赤羽教授の知り合いとはいえ、村への不法侵入者が彼の監視を離れてうろうろしているのが気になったのだろう。

「今日の灯籠巡りの準備ですかー？ 朝からご精が出ますねー」

「真夏の日差しはワシのような老体には辛いから朝のうちに済ませとるだけだ。何か用かな？」

「息子さんのお部屋を見せていただこうかと思いましたがー」

何のために、とは言わず率直に用件を言ったために、あまり意味

が伝わらなかったようで、伊戸部老はしばらく表情を固め、よく吟味しなければ千鶴の要求の意味がわからなかったようだ。

「……何をする気かな？」

「蠅人形魔術の件で調査しようと思ひましてー」

「余所者には関係のない話だ。悪いが帰ってくれ」

予想されていた答えだったのか、あるいはどう答えようともし対応をするつもりだったのかもしれない、とにかく伊戸部老は切り捨てるような口調で言った。

「赤羽教授から許可をいただいているのですがー」と、千鶴が教授からもらった手紙を出して見せるも、伊戸部老の態度は変わらない。「いくら赤羽君の弟子だろうと無関係なものには変わらんだろう。ワシはただ余所者の心無い好奇心で事態を引つ掻き回してほしくないだけだ」

「知りたいと思わないんですか？ 息子さんがどこに消えたのか、そして何をしたかったのか？」きびすを返して去ろうとする老人に千鶴は言った。「ひよつとすると彼は無実かもしれませんがー」

「……本当か？」

最後の一言が利いたか、伊戸部老は足を止めて振り返る。

「万が一、という可能性ですが僕はそれもあると思っていますよー」

本気かどうか確かめようとしたのだろう、じろりと伊戸部老が数瞬にらむ。しかし千鶴はまったく動じず、いつもの締まりのない笑みで受け流した。

「いいだろう、ついてきなさい」

お盆の間、旧白灯村は閉鎖され、外からの観光客がまったく入ってこないで、蠟人形館もそれにあわせて休館となっている。

「ま、いつもどおり開けていても、相当の蠟人形マニアしか来んから、まったく問題はないがな」

この洋館の維持については村のほうから補助金が出ているので伊戸部老人も特に生活に困ることはないらしい。そういった体制が状況をさらに悪化させているのかもしれないが。

「楽そうではないですねー」

「確かに呑気そうなアンタにや向いとるよ。だが、ワシには少々屈だ。せっかく蠟人形が作れるのに腕を振ることができない。今となってはもう遅いが、アレのことがなければ他の町に移住しとったかも知れんな」

つい失念し^{しつねん}そうになるが、伊戸部老はもとも外から村が町おこしの蠟人形館を設立するためにつれてきた蠟人形職人である。よって地元としての愛着もなく、蠟人形職人としての行き方も失えば失望するのも無理はないのかもしれない。

そこでふと思ひ当たった千鶴は伊戸部老に尋ねてみた。

「そつえばどうして伊戸部さんは息子さんをイタリア留学させたんですかー？」

蠟人形の芸術としての地位は低い。ましてやこのような辺境の蠟人形館を継がせるためにだけにわざわざ留学までさせるだろうか。

「二階の作品は見たか？」

あの一階のものとは明らかに一味違った、表現力の強い作品群のことだろう。

「はい、なかなか面白い作品でしたー」

ここが交通の便さえよければ、もしくはこの蠟人形館が首都圏にあればあれらを目玉にこの蠟人形館はお盆に休むことなどできないくらい人で賑わっていたにちがいない。

「あれはイタリアへ行く前の作品だ。何も学ばない原石の状態であれだ。こんな小さな蠟人形館で終わる器じゃない。きちんと芸術を学ばせて、蠟人形の芸術家としてどこまでいけるか、見てみたかった」

息子に見た夢を語る老職人の声は先ほどまでの千鶴を拒絶する意思が込められた硬質なそれと比べて明らかに熱を帯びている。彼も蠟人形職人の世界に夢を抱いていたのかもしれない。だが、このような誰も来ない蠟人形館にやってくることをみると、あまり職人として満足な道を歩いてきたわけではなさそうだ。自身がかなえられなかった夢を、いつしか伊戸部老は息子を通して見るようになったのだろう。

「イタリアから帰った後の作品はあるの？」

横から今まで黙って話を聞いていた雛子が口を挟む。

「あの七体の蠟人形だけだ。確かに精巧さは増しておるが、アレの本来のセンスはまったく生かされておらんよ」

「その七体の蠟人形を作っている間はまったく気付かなかったの？」
「ああ、作ってる間はワシをアトリエに入れなんだし、出かけるときはいつもどこかに隠してしまっていたからな」

伊戸部が寝室として使っていた部屋は蠟人形館の二階、一階のアトリエと同じように、ロープで区切られた順路の奥にあった。伊戸部老は三つの錠じようを順番にあけていくと、ドアを開けて言った。

「ここが倅せがれの部屋だ。時々掃除のために入りはするが、物の位置は当時のまま動かしとらん」

そして、ドアだけ開けて、千鶴と雛子を部屋の中に促すと、自身は部屋から一步離れて言う。

「それじゃワシは祭の仕事に戻る。好きなだけ時間をかけてくれて構わないが、手は触れて動かしたり壊したりしないように」

「はい、わかりましたー。ありがとうございますー」

千鶴の礼が聞こえたか聞こえないか、とにかく伊戸部老はその場からあっさりと立ち去った。

「……やっぱり忌むべき部屋ってことかしら」

立ち去るにしても一歩たりとも足を踏み入れようとすらしなかった伊戸部老の様子に、雛子が怪訝けげんそうに眉をしかめる。あのいくつも鍵を使った嚴重な施錠といい、アトリエにある封印された伊戸部の蠟人形を思い起こさせる。

伊戸部老が去ったところで、早速部屋の物色をし始める千鶴に、

雛子が尋ねた。

「ねえ、あの伊戸部に言ってた、伊戸部礼二が無実かもしれないって本当？」

「いや、十中八九黒だね、彼は。ああでも言わないとこの部屋みせてくれなかったでしょー？ 方便、方便」

本棚を眺めながら、さらつと白状をする千鶴。へらへらしているようでなかなか腹黒い。

「方便にしても、よくアレで通してくれたわねー」

「それだけ何も知らないってことなんじゃないかなー、あの人」

答えながら、千鶴はおもむろにその書物のひとつを手にとってぱらぱらとめくり始める。

「どういうこと？」

「どうして伊戸部さんがあの蠟人還ろうにんがえしに参加してると思うー？」

その問いに、雛子のはつとした。そういえば、蠟人形魔術事件において、伊戸部老の立場は微妙だ。本来、犯人の父親として、非難されてもおかしくないのだが、犯人である伊戸部礼二の失踪の上、魔術めいた演出なども相まって、殺人事件とも誘拐事件ともとられにくい状況ができあがり、かろうじて村を追われるところを免れている。また、蠟人還しの儀式に参加していることが、伊戸部老を被害者側の立場に立っているイメージを与え、？犯人の父親？として意識させないように働きかける効果があったようだ。

「え？ まさかそのために？」そこまで考えた雛子が突如浮かんだ結論に声を上げた。

「そこまで計算していたわけじゃないだろうけど、息子の罪滅ぼしのつもりだったんじゃないかなー」

細かいことは置いておいて、真相としては二つの場合が考えられる。一つが、蠟人形魔術は本当であり、アトリエにある六体の蠟人形が消えた娘達自身であること。二つ目は、蠟人形魔術はただの演出であり、蠟人形はただの蠟人形、そして本物の娘たちは殺されたか攫^{さら}われたということ。

前者の場合、万が一蠟人形から本当の姿に戻すことができれば伊戸部礼二の罪は大分消える。後者の場合においても、被害者家族の希望を消さず、全面協力することで、被害者家族の伊戸部老に対する悪感情はほぼ中和できるのである。

「それは分かったけど、どうして知らないって言うのよ？ 全部分かって隠してるだけかもしれないじゃないの」
「だったら息子が無実かもしれないって言った時点で僕らをここに通さないでしょー？」

それに、この部屋といい、アトリエといい、よく保存されている。犯罪者となった息子の物など全部処分してしまってもおかしくないのに。

「ひょっとしたらまだ無実かもしれないと信じて待ってるのかもしれないなー、息子さんが帰ってくるの」

それから二人は言葉を交わさず何か手がかりになるものを求めて部屋を探索した。改めてみると伊戸部礼二の部屋はおよそ一般人が考える芸術家の部屋らしい。

シンプルであり余計なものを置いていないが、その代わりに蠟人形の仕上げに使う彫刻刀などが机の上にくらがっている。そのそ

ばには下書きをするために使ったのであろうスケッチブックとナイフで削った鉛筆がある。

それなりに片付いてはいるが、どことなく汚れている。伊戸部老は時々掃除をしているようだったが、それでも部屋のあちこちに塗料の跳ねた跡や、削った蠟のくずなどが見受けられた。

唯一異様なのが本棚だ。大半が日本語以外の本であり、装丁からしてあきらかに美術書や実用書、あるいは小説といったまともに流通している本ではない。

「ハア、よく読むわね、こんな本」

学校の授業で少しかじった英語ならまだ分かりそうなものだが、これは読み方がなんとなく分かる程度で意味はさっぱり分からない。

「たしか伊戸部礼二が留学してたのはイタリアよね。ならイタリア語なのかしら？」

「違うよー。多分ドイツ語だよ、これー」

千鶴にも登山用語を除いてドイツ語はさっぱりだが、それでも雰囲気からなんとなく分かる。しかしイタリアに行っていた伊戸部にドイツ語が読めたのだろうか、他の本も見てみたが、日本語でない本はほとんどがドイツ語だった。

ぱらぱらとめくって行くうちに、井上巡査からもらった資料に目を通してある時点で思い当たったことが確信を帯びていく。

「この本は研究用に使われたものじゃないねー」

「え、何で？」

「普通研究に使われるとさー、本ってあちこち付箋が貼られたり、線が引いてあったりするもんなんだー」

だが実際に伊戸部の蔵書の中で怪しい本にはそれらしき痕跡は認められなかった。

「そういう人だったんじゃない？」

「でも日本語のイタリア美術史の本には線が引いてあるよー？」と、千鶴は別の本を開いて見せる。確かに要所要所に付箋が張られ、赤線が引かれていた。

「怪しい本だから汚したら呪われると思ったとか？」

「あー、それはあるかもねー」

少しばかり突飛な発想ではあるが、特に否定できないので、とりあえず相槌を打ちつつ今度は机の引き出しを開けてみた。

一番上が彫刻刀などの道具類を、二段目は塗料だった。そして一番下の段には――

「ノートだー」

二、三冊の古びたノートが置かれていた。先ほど交番で貸してもらったノートと古さは似ている。おそらく、伊戸部の研究ノートだろう。

「どれどれ？」と、雛子は好奇心をむき出しにして千鶴の開いたノートを覗き込む。初対面るとき、千鶴を出歯亀呼ばわりした気持ちは棚の上にしまったらしい。

手にとってぱらぱらとめくると雛子は眉をしかめていった。

「うわあ、異様……」

それは本人以外には、もしくは本人も解読ができるかどうか怪しい、混沌とした内容だった。行間や文字の大きさの一定しない文体、

文字からしておそらくこれもドイツ語だろう。

一応全てのノートをざっと見てみたが、どれも同じ調子だった。これをどう見るのか気になり、尋ねようと雛子が彼の顔を覗き込んで驚いた。千鶴の顔から笑みが消えて、あるうことか眉間みけんにしわが刻まれていたのだ。しばらくブツブツと何かを口の中で呟つぶやいていたが、やがて自分のノートにメモを取り始める。

書き留めた文章に目を通し、しばらく黙考すると、千鶴はパタンとノートを閉じて大きくため息をついた。

「……流石さすがにこれは予想外だなー」

見る場所は全て見たので、千鶴と雛子は引き出しや本を元の場所に戻した後、洋館を出た。外では先ほどと同じように伊戸部老が燭台を相手に何か作業をしていた。

「何か手がかりは見つかったか？」

「ええ、まあ」

苦笑を返した後、千鶴はしばらく伊戸部老を見つめた後にたずねた。

「……伊戸部さんは、真実は公表されるべきだと思いますかー？」

意図いとの読めない質問に、老人はしばらく黙考した後あとに答えた。

「……それは、誰を大切に想つとるかによるだろ」

09 『村立図書館にて』

夏になると蒸し暑くなる日本は、せめて気持ちだけでも涼やかにありたいという気持ちが強いのか、この季節の風物詩が特に多い。目の前の冷麦^{のれん}しかり、暖簾^{のれん}の横に下げられた風鈴の音しかり。旧白灯村は比較的山奥にあるため、夏でも日陰は涼しい。さらに、この蕎麦屋のように昔ながらの日本家屋となると風通しもよいのでこの真夏でもクーラー要らずである。

蛭人形館を離れたのが十一時半過ぎだった。そこで、千鶴は「少し休憩もしたいし、少し早いけどお昼にしようか」と、雛子にこの蕎麦屋に案内させて今に至る。

おごるというので、もつと高いものを頼んでやろうかと考えたのだが、いろいろ頭がいっぱいでどうにも食欲が振るわず、せっかくの蕎麦屋で家でも食べられる冷麦^{ひやむぎ}しか食べる気がおきなかった。

流石に大学生の男らしく、天ぷらそば定食をあっという間にやつつけた千鶴は先ほどから井上巡査から預かってきたノートと自分のノートを見比べ、時折自分のノートにメモを取っている。

「ねえ、何か分かったの？」

「まあ、少しはねー」

ペンを走らせるノートから顔を上げずに答える。それ以上の詳細は教える気がないらしい。分からないことだらけのこっちとしては気になって仕方がない。

どうも先ほど、特に伊戸部礼二の研究ノートを見てから千鶴の様子がおかしい。その前までもつとのんきそうな雰囲気だったのだが、今はそれが影を潜め、笑みを浮かべていてもあまり余裕があるようには思えない。

「まさか、蠟人形魔術は本物だった、なんて言い出すんじゃないでしょうね」

「それはないよー。あの伊戸部礼二の部屋は後から捏造ねつぞうされたものだからさー」

「……どうしてそう断言できるのよ？ あのノートがあつたじゃない」

本に線が引かれていないだとか、付箋がつけられていない、などと千鶴は言っていたが、あの凶器じみた覚え書きこそが伊戸部礼二が魔術の研究を行っていた証ではないのか。

「もともと、それは疑っていたんだー。さっきの警官のお兄さんが貸してくれたノートを見た時点でねー」

はじめに聞いた話は、魔術の研究ノートが見つかったから蠟人形魔術の噂が広がったというものだった。

しかし千鶴が井上巡査から預かった彼の父親の捜査ノートを見ると、伊戸部の部屋を探索した記述はあれど、そういった魔術的な本や研究ノートについてはまったく触れられていなかった。彼が蠟人形魔術と呼んだ理由については、あくまでも事件における魔術的な展開を見て、である。

「だから、あの部屋は事件の後しばらくして作られたものなんだよー」

「誰が？ 何のために？」

「……それはヒミツー。最後にまとめて話すよー」

口元はいたずらっぽく笑って言う千鶴だったが目が笑っていない。手元の水を飲み干すと、会計のために店員を呼ぶ。

「お姉さん、お会計お願いしまーす」

二人分の料金を払い、千鶴は再び真夏のまぶしい空の下に出て行く。

「次はどこに案内すればいいの？」

「そうだねー、じゃ、涼しいところがいいなー」

元々、村立の規模である白灯村の図書館は、大学のそれと比べると図書館とは呼べないほどに小さい。蔵書もそれほどよくはなさそうだ。

「何か調べごとでもするの？」

「まーねー。あ、パソコンがあるんだー」

蔵書は足りないながらも、図書館として一通りの調べ物ができるようにとの配慮なのか、隅のほうに三台だけインターネットに接続されているパソコンがある。使える人、もしくは興味のある人が少ないためか、三台だけでも利用者はいない。

「これなら結構楽に調べられるかもー」

いそいそとパソコンの前に座り、まずは図書館検索システムを立ち上げ、キーワードを入力してこの図書館に収められている本で関係のありそうな本をリストアップしていく。

それを題名と番号をメモすると、雛子に手渡していった。

「このリストアップしてある本、探してきてくれるかなー？」

「うつ……」

いかにも面倒そうな頼みごとに、雛子は少し戸惑ったようだが、ここに残っても結局やることはないので、引き受けることにした。リストアップされた本は、十数冊に及び、図書館に慣れない雛子には、探すのは相当骨が折れそうだ。

千鶴が指定した本は三種類に大別された。

蠟、または蠟人形に関することを書いた本、イタリアについて書いた本、そして、美術について書いた本。美術については蠟人形館の二階に並べられていた伊戸部作品群に近い雰囲気を持つ芸術家に関するものだ。要するに、伊戸部礼二から連想されることをキーワードに検索したらしい。それに加えて、白灯村の地図が付け足されていた。

一応、カテゴリごとの探索なので一冊見つければ同じような場所に何冊も見つかって、思ったよりも本探しは楽に進んだ。

「ふう、本っていうのもかさばる上に重いわね」

こんな分厚い本を読んでいる者が本当にいるのだろうか。閲覧机に本を置いて一休みすることにして、本の中でも一番興味の持てそうな、イタリアの観光名所を紹介する本を手に取り、ページをぺらぺらとめくっていく。なるほど、ヴェネチアやフィレンツェなどの有名都市をはじめ、比較的マイナーな観光スポットのことも詳しく書かれている。

ふと、雛子は奥付の部分に貼り付けられた封筒に差しこまれているカードを抜き取ってみた。そこに今までこの本を借りた人の名前が書かれているのである。

その名前を見て、雛子はピタリと動きを止めた。

『伊戸部礼二』

日付は四十年前。なんとなくまだ幼い感じのする字からして、伊戸部が中学を卒業してイタリアに渡る前のものだろう。このころからイタリアについて勉強をしていたのだ。もしかしたらイタリア語会話の本も借りて読んでいたかもしれない。

他の本も調べてみると、伊戸部礼二の名前が書かれたカードがいくつも出てくる。雛子は胸が高鳴るのを感じた。四十年前前のことではあるが、自分たちが追う謎の鍵を握る人物が実際に手に取った本。

彼は何を知りたくて読んだのか。

この本に何を見たのか。

そしてどんな気持ちを抱いたのか。

これらを読めば、伊戸部礼二を理解できるかもしれない。

雛子は、再び本を抱えると、残りの本を探すべく閲覧机から離れて行った。

10『川ならざる川』

図書館での調べ物を終えるころには、太陽も西に沈みかけ、空を赤く染め上げていた。

「ごめんねー、付き合わせちゃって。図書館とかつまんなくなかったー？」

「……そういう気遣いきづかいができるとは意外だわ……」

どこことなく、朴念仁ぼくねんじん的な雰囲気を持つている千鶴だ。自分の世界に没頭している間は、一緒にいる人への配慮などないのだと思っていた。雛子名義で借りてきた本（住人でない千鶴には借りられなかった）も全部千鶴が持っている。

「失礼なー。僕だって、女の子に優しくするくらいできるよー？」

「……別に、つまんなくはなかったわよ。心配しなくても」

あれからずっと、本を読んでいた。伊戸部礼二が読んだ本。蠅人形の本。イタリアの本。

知らないことでいっぱいだった。そしていろいろなことを知った。イタリアの本を読んでいる間、雛子は図書館ではなく、イタリア中を旅行していたのだ。本などほとんど読んだことはなかった雛子だったが、進んであんなに分厚い本を読む人のことが少し分かった気がする。

これからは少しずつ本を読んでみよう。

今日はもうどこにも行くことはないというので、千鶴と雛子は三沢家に戻ってきた。夕食を済ませた後、雛子の部屋に上がり、図書

館で借りてきた本を読む。

「……って、何であたしの部屋なのよ」

やや乱暴に麦茶の入ったグラスを、千鶴の前に置きながら言った。

「だって、なんか教授は何か研究してるみたいで邪魔できないし、かといってリビングに残るのも、君のお父さんやお母さんの目に付いて困るでしょう？」

カラカラと氷を鳴らしながら答える千鶴。今度はちゃんと麦茶に氷が入っているところを見ると、少しは雛子の千鶴に対する評価は変わってきているらしい。

千鶴は、今は村の資料と地図を見比べていた。図書館で取ってきたコピーに白灯村のホームページ（その存在を雛子は知らなかった）をプリントした資料と照らし合わせては何かを書き込んでいる。

「……大体は分かったみたいね」

「んー、まあねー」

「明日には分かりそうなの？」

「んー、多分ねー、でも肝心なところが詰められないー」

確かに、先ほどまでは頻繁ひんぱんに地図のコピーにペンを入れていたのだが、今握られたペンはくるりくると彼の指の上で踊っているだけだ。体も落ち着きなく動かされている。

「……ひよつとして焦ってるの？」

「もしかしなくても焦ってるよー」

雛子に指摘された千鶴が苦笑して答えた。いつも間延びした口調で焦ることなど一切なさそうな彼が焦っていることを認め、雛子はへえ、と感嘆の声を漏らす。

「でも、どうしていつもそんな間の抜けた話し方をしてるの？」

「元々は早口だったんだよー」

幼い頃から本をよく読み、語彙ゴウの多かった千鶴はそれだけたくさん話し、その早口と言葉に乗せられた情報量の多さから「もつとゆつくり話さない」と注意されてきたのだ。

そして、その早口に見合うだけのせつかちな性格だった。おまけになまじ頭がよかったものだから、完璧主義まで身についてしまったものだ。

ある日、数学の課題にあった問題で手間取った。いつもどおり誰よりも早く終わらせようと、配られた瞬間から手をつけたはいいのもの、ある問題に引っかかってしまい、これに悩んでいる間にどんな他の生徒が課題を提出していく。

提出期限前夜になっても、さっぱり解けない。何度か無理やりやり方を変えてみてもなかなかうまくいかなかった。徹夜で考えた拳句、次の日は高熱を出して寝込んでしまった。

徹夜をした理由を聞いた千鶴の母親は「それならそこは先生に聞くか、何も書かないまま出せばよかったじゃない」と言った。

それはとんでもない提案だった。真面目で完璧主義者だった千鶴にはわからないまま提出することも、先生や他の生徒に聞くのも、その問題に負けたようで嫌だったのだ。

この数学の問題の件を抜いても、四六時中何かをしており、気を

張りっぱなしで生きてきた千鶴は、時々そのツケを支払わされるような形で熱を出して寝込んでいた。おそらくこれは根を詰めやすい性分であった千鶴の肉体が、精神的に限界を迎える前に強制的に休息を取らせる自己防衛機能のようなものだったのだろう。

ともかく、そういったことでかなり限界を感じていた千鶴は少し気楽にいられる生き方を検討し始めた。これでさえ一生懸命取り組みもうというのは本末転倒だったかもしれないが。

しかし心にどう余裕を持とうとしても、中々今までの生き方が変えられない。どうしたものかと母親に相談すると、「まずはゆっくり喋ることにしたら？」と、助言してくれたのだ。

気が急くのはどうも制御できないが、それならできそうだと思い、実際にやってみると、思いのほかうまくいった。始めは言いたいことがたくさんあるのに、なかなか喋れなくて、もどかしい思いもしたが、それに慣れてくると、本当に自分の言いたいことだけを選別し、簡潔にまとめられるようになった。

同じように行動も本当にやりたいこと、やる必要のあることだけを抑えていれば、何の支障もなく生活できることがわかり、時間と気持ちに余裕が生まれたのである。

「それが身に付いたあとはもう、楽で楽でー」

あつはつは、と実に晴れやかな笑みを浮かべる千鶴である。

「想像が付かないわ……」

この、ほにやら男が、完璧主義だったなどとは。

「あはは、それは分かるけどさー、今でも何かやるときは結構根を

詰めたりして大変なんだよー。これから卒論もあるしさー」

「へえ……で、今は何で引つかかってるわけ？」

「うん、ここなんだけどねー」と、千鶴は再び地図のほうに目を落とす。話がすこし脇道にそれたのがよい影響を及ぼしたのか、地図へ取り組むときの雰囲気がいくらか和らいでいる。

「川のことでちよつと腑^ふに落ちないところがあつてさー」

旧白灯村にはその盆地を突っ切るように、小川が五本流れている。それが村の出入り口あたりで合流し、白灯川となっているわけだが、千鶴が地図を見る限りもう一本、川が流れていそうな地形があつたのである。

「ここなんだけどー」と、とんとん、と千鶴が指し示したのは村の北端あたりだった。

千鶴は登山部に入っている関係上、地図を読むのに長けている。地図では、小さな谷状をした筋が、村を回りこむように走っているのだが、そこには川の表記はなく、村の情報からも、この六本目の川の名前はない。そして、千鶴が最初来たとき、上から見た景観でも川は五本しか見えなかった。

「僕が今探しているのは攫^{さら}われた六人の遺体の隠し場所なんだー」

千鶴は初めて“遺体”という言葉を使ったが、雛子は別段驚いた様子は見せなかった。六人も人間と男一人、それら全部が全部、警察の目を逃れて今まで暮らしているとは到底思えない。

「で、いろいろ条件を考えてみたんだけど、その条件に合うのがここなんだよ」

今度示されたのは、その“川ならざる川”の一部、地図からしてかなりの急勾配で、実際崖になっているであろう場所だ。

「ただ、ここが川でないと条件に合わないんだー」

「……川“だった”のよ。そこ」

ほとんど駄目でもともと、自分の考えを整理するためにあえて声に出していつてみたくらいのつもりだった千鶴は、思わぬ雛子の言葉に、弾かれるように顔を上げた。

「どういうこと？」

「十年前、大雨が降ったときにここで土砂崩れが起きたのよ」

そのときの大雨は記録的なもので、当時村を流れていた六本の小川もこのときばかりは、水位が脅威となるほど水かさが増したらしい。そしてとうとうその一本が土砂崩れを起こすともにあふれ出したのだ。

その土砂崩れと洪水の被害をもろに受けたのが村の北のほうに住んでいる人々である。家は潰された上に土地が水浸し。とても立て直せる様子ではない。

よって、家を失くした者のほとんどは各地の親戚などを頼りに、村を後にしていったのである。

そして、雛子たち三沢家もその家を失くした家族のひとつだった。雛子たちの場合は、外に身寄りがあるわけでもないし、何より失踪した母方の姉・高野日奈のために地元に残らなければならなかった。どうしたものかと途方に暮れていたとき、声を掛けてきたのが、あの事件のあと、順調に博士号を獲得し、大学で民俗学を教えている赤羽教授だった。

どのみち、一年でいくらか戻らないし、一人で住むにしても部屋

はたくさん余っているから、うちに来ればいい、と。

「それ以来、オジサマは三沢家にとって恩人なのよ」

「あー、だから教授の家に三沢家が住んでたのかー」

その点は千鶴も気になっていたのだが、事情があるのだけはわかったのであちから話し出さない限り、聞かなかったのである。

「それでー？ 川のほうはどうなったのー？」

「そのときの土砂崩れで川の流れが変わっちゃって、ここ的一本に合流して流れるようになったの」

そして水が流れなくなった、小川は埋め立てられてしまった。そのおかげで交通の便がかなりよくなった面もあり、それはそれでよいことだったのだが。

「じゃ、三十年前の時点ではここって川だったんだー？」

「そういうことね」

かちり、自分の頭の中でパズルの最後のピースがはまる音がした。千鶴は、ノートを開き今得た情報を書き込むと、ぱらぱらとノートを見直して情報を整理する。そして最後のページを見終わると、パシンと音をさせて閉じた。

その様子に、雛子がおずおずと千鶴の顔を覗き込んで尋ねた。

「……疑問は解けたの？」

「うん、考えることはもうないねー」

あとは事実の裏づけだけだ。

11『真の愛とは得がたいもの』

「あら、俊彦さん。何かお探しですか？」

ずっと離れの書齋に籠りっぱなしだった赤羽が母屋の居間に来ているのを見つけた雛子の母・三沢利奈が声をかけた。

「ああ、少し小腹が空いたので、何かつまむものでもないか……と、思ったら随分いいものを食べているじゃないか、三沢君」

赤羽が目を向けたのは居間で茶を飲んでいた雛子の父・芳雄が食べている豆大福である。

「茶に付き合うなら食わせてやるぞ」

「それでは相伴に預かるとしよう」

芳雄は赤羽の同級で、この小さな村ゆえ、当然のように親友同士の間柄だった。

「しかし、俊彦さんはまったく外出なさらないんですね。せつかく村に帰ってきたのだから、もつと外に出てもいいじゃないですか」「バカ、故郷だからこそだろう？　いまさら見て回ってもしかたないし、こいつ目が悪いくせに昔から本の虫で友達もロクにいなかったからな」

利奈の言葉に、芳雄が赤羽に豆大福を勧めながら返す。

「それにしたって散歩くらいしなきゃ体に悪いでしょう？　せつかく自然があって散歩するにはいいところなのに。青山君だって今日

も朝早くから出かけてるんですよ」

「……雛子も一緒か？」

里奈の言葉に、やや動揺した様子で芳雄が聞き返すと、彼女はくすりと笑ってうなずいた。

「ええ、一緒ですよ？ 昨日もずっと一緒に行動してたみたいだし、雛子にしては珍しくあの男の子を気に入ったみたいね」

「つ、ついに雛子が嫁に行ってしまうのか……」

どこことなく落胆の様子を見せる芳雄である。何故、この村の人々は付き合う、付き合わないを通り越して結婚まで話を飛躍させてしまふのだろうか。

「結婚どころかまだ付き合ってもいないというのに……。ところで、俊彦さん、あの青山君という子はどういう子なんです？」

「そうだ。いくら、当人同士が好き合っても、いい加減な男には嫁がせられん」

芳雄はやはり話を飛躍させたまま、赤羽に答えを促す。赤羽はふと口元に笑みを浮かべて答えた。

「……優秀な生徒だと私は思っているよ。登山部で、並みの若者より体力もあるし、頭もいい」

第一、第二印象はいつも笑っていて、人によっては軽薄と取られるかもしれないが、ああいうゆっくりとした口調の裏では彼の頭はとんでもない速さで回っていて、外見とは想像がつかなくくらいに深いことを考えている。

赤羽が気に入っているのはそこだった。あの和やかな雰囲気と、

彼の思考能力のギャップ。能ある鷹は爪隠すというが、青山千鶴という男はそれを地で行っている。

「雛子君が最初あれだけ毛嫌いしていたのに、結局今日も一緒に行動しているのも、ああやって一緒に歩き回っているうちに、彼のそういう一面をみて見直したからだと思うがね。恋愛関係としてはあまり経験があるようには見えないが、誠実であることは確かだよ」

その答えを聞いて芳雄が複雑な顔をする。娘の相手として千鶴の人格の保障が得られて安心する反面、娘がボーイフレンドを作るということに口を挟めなくなつて残念にも思ふ心があるのだろう。

「まあ、雛子も十八じゃないですか。それに高校を卒業したら俊彦さんの大学に入って勉強したいって言っていますし」

群馬の奥である白灯からでは赤羽や千鶴の大学にはとても通えない。であるからして、そのうち彼氏云々どころの話ではなくなるのだ。

「十八歳……か」

「ますます義姉ねえさんに似てきた気がするんだよなあ」

赤羽は雛子の年齢を感慨深く口にした心を読みとつたように、芳雄が呟く。

利奈の姉であり、赤羽の恋人である高野日奈が失踪したのが二十二歳、まだ四歳の開きがあるがそれでも、時々見紛みまがえるほどに、雛子と当時の彼女の容姿が似通つてきている。あと四年もすればほとんど瓜二つになるに違いない。

無論、生き方が違つたため、雰囲気的な意味では大分違ふのだが、それでも雛子を見ていると赤羽の胸は守れなかった恋人のことを否

が応にも思い出させられ、胸が締め付けられる心地がする。

「……俊彦さんも、姉さんのことにこだわらずに結婚なさればよかったのに」

「そうしようとも思っただが……駄目だった」

あれから三十年。早ければもう孫を持つてもおかしくない年になったものだが、あれ以来恋人と呼べる人間は現れていない。彼女の失踪が自分を不幸にしては彼女が悲しがるだろうと、幸せを求め、ちようど言い寄ってきた女性と付き合ったこともあるが、それでも日奈と比べてしまい、うまく行かなかった。

真の愛とは得がたいもの。彼女を失ってから三十年で身に染みわたるのがそのことだった。

「真の愛、ですか」

「見合い結婚のウチには縁遠い話だな」と、芳雄が笑う。

「いやいや、過程は重要ではないよ。見合い結婚でも真の愛は生まれると私は思うよ。要するにうまく行けばいいのだよ。私には君たち夫婦の間には真の愛が見える」

赤羽の言葉に、三沢夫婦が顔を見合わせる。息の合ったその反応に小さく笑う。そして、再びその瞳に憂いを帯びさせ、縁側から見える夏の青空を見上げた。

「……まあ真の愛が得られても、守りきれなければ悲しいだけだね」

「ねえ俊彦さん、雛子たちは三十年前の事件を調べているんですよ?」

しばしの沈黙を破って尋ねたのは利奈だ。
だが、赤羽は答えなかった。

「あの子達は真相を見つけられるのかしら？」

「……青山君なら、あるいは見つけられるかもしれないね」

とても見つけれないと思ったなら、千鶴が首を突っ込むのを止めたりしなかった。もしかしたら、と思うからこそ一度止めたのだ。

「私は、見つけれなければいいと思います」

思いの外はつきりとした意見に、赤羽に利奈に振り返り、芳雄もうつむけていた顔を上げる。視線を受けて、利奈は困ったような苦笑を見せて言った。

「だって今さら姉さんが帰ってきてても、どう迎えたらいいのかもわからないし、死んでしまっているにしても、それがわかってしまえば、みんな姉さんを忘れてしまうでしょう？」

死者は忘れ去られる。例え、覚えていようと努力をしても、ただの死者は数世代もすれば完全にその存在をこの世に残せなくなる。蠟人形魔術の犠牲者として、あの蠟人形館の地下アトリエに限り、人々は彼女のことを忘れない。その姿もそこにあるままだ。正直、蠟人形魔術などは疑い混じりだ。利奈は高野日奈がそこに在るために毎年の蠟人還しに参加している。

だが、動かない蠟人形のためにそこまで心を砕くべきだろうか。他にも目を向けるべき対象があるのではないだろうか。そう、赤羽は思っている。だが、その“希望”を奪うことが果たしてよい方向に転がるのか否か、それはわからない。

だから、その判断を本来部外者である千鶴が、この事件を解くか否かに任せたのである。彼が真実にたどり着けば、希望が失われたとしても何かの天命ということだろう。

そこに乱暴にインターホンが鳴らされた。利奈が応答するのを待つのももどかかったのか、その客は庭に転がり込むように現れた。

「あら、本間さんじゃない、どうかしました？」

本間と呼ばれた中年の男は息を整えると、未だ冷めない興奮を一分も隠さずに行った。

「あ、アンタのこの客だろ、あの余所者の若造！　アイツと雛子がえれえモン見つけたぞ！？　村中大騒ぎだ！」

12『発見』

時は少しさかのぼる。昨日、事件の真相に対して、一応の結論を出した千鶴は雛子と共に早朝から村の北側にある崖の土砂を掘り起こしていた。自分の推論を裏付けるためである。

もともと土砂崩れで覆われた土なので、柔らかく、思ったよりも容易に掘り進められている。ただ、柔らかいがゆえに土が崩れてくることも考えられるので、あくまでも慎重に掘り進めることになった。

セミの合唱も最高潮を迎える正午になると、二人は日陰に入って昼食をとることにした。今日は雛子が弁当を用意していたのだ。

千鶴が、期待感をこめた眼差しで見つめる中、雛子は淡々と弁当を広げていく。鳥のから揚げ、玉子焼き、焼きししゃも、豚のしょうが焼き、もやし炒め、煮物、などが色鮮やかに収められており、もうひとつの容器の中にはきれいな三角形をしたおにぎりが並べられている。

「おー、豪勢だねー。作るの大変だったんじゃない？」

量はともかく種類が多い。煮物など昨日の残り物などではなく新しく作ったもので相当時間がかかっただろう。

「そりゃ……、人に食べてもらうとなると嫌でも気合が入るわよ」

頬を若干赤くした雛子が、照れ隠しのつもりか、いささかつつけんだんな調子で答えるのをほえましく受け取ると、千鶴は「では、いただきまーす」と、手を合わせ、玉子焼きをつまんで食べる。

玉子焼きも十分に手の込んだだし巻き卵であり、滑らかな舌触り

とともに、口の中に出汁の旨味が広がっていき、夏の暑さで減退しがちな食欲を掻き立てる。

「うん、美味しい!」

千鶴の反応をうかがってちらちらと視線をよこしていた雛子は、すまし顔で、答えて言った。

「と、当然よ。不味いモノを食べさせるわけないじゃない」

とはいうものの顔は紅潮し、浮かぶ笑みを我慢してか、口元が引きつっている。

「素直に喜べばいいのに」

「別に喜んでなんかないわよ」

千鶴が指摘すると、雛子は顔が見られないようにうつむいて、おにぎりを頬張る。

「あのさー、見つかったちゃったら、話す暇も無くなるだろうし、お昼の間に話しておこうと思うんだけどさー」

「……何よ」

からかわれたことを根にもってか、若干睨むような目つきで、雛子が千鶴に視線を戻す。

「三十年前の事件の真相だよー」

その一言で、うつむきがちだった雛子の顔が上げられた。昨日からずっと調べていたことだけに、その真実を聞くとすると、興奮を

隠せない。

「まず、今掘つてるところから何が出てくるのかだけどー」

「……“屍蠟”……で合つてる？」

意外にも雛子の口から答えが出たので、千鶴は数瞬動きを止めた。

「へえ、それに気づいたんだー」

「昨日は私も本を読んでいたのよ？」

雛子が読んでいた本はもともと千鶴が選んでいたものだ。見当のついていた彼の選んだ本なのだから、それを読めばピンとくるものがあってもおかしくない。

「その通り。僕の考えが間違っていなければ、あの崖の下には失踪した六人の屍蠟がある」

屍蠟。ミステリーが好きな人にはわりと知られているものであるが、要するに遺体の状態の一種を表す言葉である。生物の体は生命活動を止めると、微生物などの働きで分解され、腐敗するのであるが、とある条件下に置かれると、遺体は腐敗せずに、体の脂肪分が変化して蠟状になってしまう。

つまり、本当に“人体が蠟になってしまふ”わけだ。人為的に屍蠟を作る方法、それは伊戸部礼二が研究していた“蠟人形魔術”だったのである。

「でも、どうして伊戸部礼二はそんなことをしたの？」

よほど異常な思想が無い限り、そのような研究はしようとも思わないだろう。

「それに、屍蠟を作った伊戸部礼二自身はどこに行ったの？」

「僕が一番話したかったのはそこなんだ」

いつもの間延びした口調はまったく出さず、千鶴はその？真実？をゆっくりと語りだした。

一時間後、休憩をすっかり取った二人は再び発掘作業に戻っていた。昼下がりの崖は日光がさんと降り注ぎ、湿気を帯びた風は生ぬるくて体温を下げる助けにはならない。

それでも、雛子はそれをまったく意に介さず、黙々とシャベルを振るい続けてきた。

つい先ほど、千鶴から聞いた話が信じられない。否、疑っていた。彼の話は理路整然としており、むしろ自分を納得させてしまった。だが、その事実は受け入れがたい。

本当のことを確かめたい。でも知るのが怖い。

「はい」

不意に、横から声をかけられた。そこには麦茶の入ったカップを持った千鶴が立っている。

「ちゃんと定期的に水分取らないと倒れるよー」

「あ、ありがとう」

雛子はカップを手にとると、中に入っている液体を一気に飲み干した。魔法瓶の中でいまだ力を保ち続けている氷に冷やされた麦茶がのどを通り抜け、全身に染み渡る心地がする。

「……やっぱりショックだったー？」

尋ねられて、雛子はカップに口をつけたままこくりと頷いた。

「じゃ、知らないほうがよかったかなー？」

続く問いに、雛子は数瞬考えると、首を振る。

「ううん、知らなくても事実是不変なもの」

さきほどから、なんとなく土を掘り返していたが、今の会話でやっと気持ちに整理がついた。

知らなくても、事実自体は変わらない。それよりも知って前へ進める道を模索できたほうがいい。

「あれ？ お前らそんなところの土掘り返して何してんだあ？」

二人が発掘作業を行っている崖の下から彼らに声をかけたのは昨日会った若い警官だった。警邏けいろ中なのか自転車に乗っている。

「あ、昨日のー……」

「おーよ、井上丈巡查だ。敬いたければ敬え」

なぜか胸を張る井上巡查である。

「お前ら何して……って昨日の今日だから、アレだろ？ 例の蟬人形事件の調査」

「ええ、まあー……」

若干、顔を引きつらせながら、千鶴が答える。それもそのはずで、こついうところを大々的に掘り返すのには、役所の許可がいるのだ

が、当然千鶴はそんな申請など行っていなかった。

そんな後ろ暗いところのある状態で、警官に会ってしまったのだから、さすがの千鶴も平常心ではいられないのだ。ここで、手続きを要求されてしまったては、今日中には確実に掘り出せなくなるし、下手をすれば許可が下りず、もう掘り返すことすら出来なくなるかもしれない。

指摘されたらどう言い逃れようかと思考をめぐらせていると、井上巡査がにやりと笑っていった。

「で、掘り返してるってことはだ、この下にホトケさんが眠ってるってわけだな？」

これからどう出るかと伺っているところに、ズバリ核心を突く意見に、思わず千鶴は一步退^{たじろ}ぐが、次に彼の口について出たのは意外な言葉だった。

「よし！ 今から若いヤツらを連れてきて手伝わせよう！」

「……はいー？」

何の追求もなく、それどころか思いがけなく出された、若い警官の提案に、千鶴は目を丸くする。

「心配すんな。暇を持て余してる連中の溜まり場知ってたんだよ。あいにく携帯なんて洒落たモンはもってねえけど、行けば確実に引張ってこれる。ちょっと待ってるよ」

止める暇もなく、彼は自転車に飛び乗り、あっという間に目の前から去っていつてしまった。

「……いいのかなー？」

「いいんじゃない？ 昔からガキ大将みたいなノリで、細かいことは気にせずに大騒ぎにするのが大好きな人だし」

「……よく警官になれたねー」

「野郎共ー！ 手エ抜くんじゃねエぞー！」

「おおー！ー！」

井上が一度去ってから二十分後、発掘現場である崖にはシャベルや手押し車を抱えた男達十数人が井上の掛け声に応えて発掘作業にとりかかった。

さすがに二人だけで発掘していたときとは比較にならないスピードで彫り進められ、初めて早々、土砂崩れの土とは明らかに違う、崖そのものの地盤が現れたりもした。

井上が連れてきた若者の中には女子の姿もあったが、そちらは力仕事ではなく、近くの店から飲み物などを調達するなどして発掘作業をする男達のサポートをしていた。

「この分なら、今日中には掘り返せるだろ」

「……井上さんって仕事で中だったのではー？」

ちなみに井上はまだ制服姿のままだ。

「ダイジョーブ、ダイジョーブ。こんな田舎だ。事件なんざそうそう起こりゃしねえよ。ま、喧嘩しそーなやつらはここに集まってるしな」

さすがに若者が集まると目立つらしく、先ほどから野次馬が集まっております、その人だかりを掻き分けて、一人の背広姿の男が千鶴たちに向かって叫んだ。

「君たちは一体、何をやっ取るんだッ！」

「ありや、まじい」と、先ほどまで井上の顔に苦味が加わる。

最初はなぜまずいのか分からなかったが、「役場の職員だ」と、付け加えられた一言で、千鶴の表情からも血の気が失せる。ここで発掘を中止させられれば、余所者でありながら勝手に発掘した千鶴には二度と発掘許可は下りないだろう。最悪、法的手段に訴えられる可能性すらある。

「許可は出ているのか？」

お盆で役場も休日の折、そんなものは出せるはずもなく、答えに困っていると、役人は警察の制服を着た井上に目をつける。

「君は井上さんとこの息子だな？ 君は警察官だろう！？ なぜ一緒にになってこんなことをしてるのかね」

一緒にやってやっているどころか、ここにいる若者連中を集めたのが井上なのであるが。

「い、いや、俺はてつきり許可は出ているモンだと」

タチの悪いことに、この軽い警官はトボケにかかったものである。

「警官がウソをつくんじゃない！ そもそも職務中だろうが君は！？」

違いない。これには言い逃れができず、井上はばつが悪そうに、そつぱを向いて沈黙した。

井上を黙らせた役人は、次に千鶴に向き直る。

「で、そっちの君は何をやっていたのですかな？ 見たところ、この村の者ではないようだ」

「えーと、それはですねー」

なるべく穏便に済ませるために、正直に説明をしようと、千鶴が口を開いたその時、背後から完成が聞こえた。

「洞窟だ！ 中に何かあるぞ！？」

13 『失踪した娘たちの行き先』

赤羽たちが、現場に到着したときにはすでに村のほとんどの住人がこの場に集まっていた。

赤羽がやってきたのに気がつくのと、並んで順番を待っていた者たちも道を空けて、彼に先を促した。赤羽は、彼らに一礼すると、雛子の両親・利奈や芳雄と共に住人たちが注視する中、ゆっくりと洞窟の中に歩いていく。

洞窟の入り口では、神妙な顔をした千鶴と、不安そうな顔をした雛子が並んで立っている。

「期待通り、と言えるかどうか分かりませんが、どうぞ」

千鶴は、懐中電灯を取り出して見せると中へと赤羽たちを案内する。

洞窟の中は涼しい白灯村の日陰にも増してひんやりとしており、また湿気に満ちているという妙な空気を持っていた。そして独特な臭気が立ち込めている。

入り口から数メートルは狭かったが、奥に行くにつれて広くなっており、やがて大広間のような大きく開けた場所に出る。

そこには机や、紙、本などが散乱し、また、壁際や机の上にはランプが配置されており、明らかに何者かがここで何らかの活動を行っていたことが伺える。

もつとも、ランプは古くなって今は使えないらしく、今は代わりに蠟燭の炎が部屋の中を照らし出していた。

そして、この場所には先客がいた。伊戸部老人をはじめ、その他

五家族、毎年“蠟人還し”を一緒に行っている人たち——つまり、蠟人形魔術の事件において失踪した娘たちの家族だった。

「これで全員が揃ったわけですね」

全員の注目が集まる中、千鶴は部屋の中央に立ち、それを取り囲む被害者家族を見回して言った。

「はじめに自己紹介をしておきます。僕は赤羽教授の大学の学生で、青山千鶴と申します。今回、蠟人形魔術の噂を聞き、それを実際に確かめてみたいと思って、この旧白灯村にやってきました」

ま、実際は忍び込んだわけですが、と苦笑して、千鶴がこの事件に関わることになった経緯を述べる。

最初は、興味本位だったこと。蠟人形館を見学して、蠟人形魔術事件のことを赤羽から聞き、生半可な気持ちで首を突っ込むことはやめようと思ったこと。

「でも、一日目に灯籠巡りをしたとき、僕はあるものを見てしまいました。そう、蠟人還しの儀式です」

奇妙な宗教儀式を見ただけなら、それほど合理にこだわる性格ではない千鶴は、その儀式が気味の悪いものでも、意味があればそれでいいと考えられた。

だが、事情を知っていた千鶴は、根拠のない希望に縛られた行為だと思い、その希望の真実を得るために、調査を開始した。

そして昨日一日を使って、資料などを調べた結果、全ての謎が氷解し、今日、その推論を裏付ける証拠を見つけたのである。

「あなた方が間違っているから止める、とは言いません。これをど

う受け止めるかはあなた方の自由です。ただ、今から僕が話すことが、すべての真実であり事実であるとだけ申し添えておきます」

「まず、“この部屋の奥にあるもの”について説明をします。こちらへどうぞ」

千鶴は、蝋燭を手にとって先導する。

洞窟には、この大きな部屋からさらに奥へ伸びる二本の道があった。千鶴が案内したのは向かって左のより大きな道だ。

その道には、両側に棺のような人一人が入れる大きさの箱が置かれていた。そしてその中に納まっているのは――

「うつ……！」

千鶴の後ろにいた者の大半が“それ”を見て息を呑み、数人がえづく。

それは、ミイラ、といって差し支えないものだった。とはいえ、ミイラとしては肉付きが悪く、骨にところどころ申し訳程度に皮と肉がついていた程度だった。

それは五つ続き、不可思議なことに奥に行くほど、ミイラについている肉が多くなっている。五つ目のものなどは顔の半分、体の八十パーセントは瑞々しく張りを残したままだ。

そして、最後の一体は一番奥に安置されていた。寝台のように盛り上がった岩の上に横たえられた、その姿は色こそ真っ白になってしまっているが、造詣は完璧な人間の姿をしている。雛子と似た目鼻立ちであり、蠟人形館の地下アトリエに残された蠟人形と同じ顔

――紛れもなく、高野日奈であった。

「姉さん……！」

利奈が思わず息を呑み、隣にいた芳雄にすがりつく。

「……これは一体何なんだ？ 探偵さんよ」

「これが人を蠟人形に変える魔法“蠟人形魔術”の成果なんです」

そう言いおいて、千鶴は屍蠟について、彼らに説明をしてやる。

「遺体は普通放っておけば腐敗するものです。ですが、ある条件下では腐敗菌は繁殖せずに、化学反応によって体の脂肪分が蠟状に変化する。それを屍の蠟と書いて“屍蠟”と呼びます」

そこで、千鶴は少し間をおいて続けた。

「そして、それを人為的に行うのが伊戸部礼二の研究していた蠟人形魔術の正体なんです」

「で、でも他のはそれほどキレイじゃないのはどうしてなの？」

被害者家族の一人がそれを尋ねる。確かに、日奈のように生前そのままに残っていてもショックだろうが、ボロボロのミイラにされた者に関しても納得がいかないのは確かだろう。

「……それは、他の五体については“失敗したから”です」

千鶴は答えると同時にノートを取り出した。

「これは皆さんもご存知の井上巡査から借りた、彼の父上が当時独自に事件を捜査していたときのノートです。これによりまずと、最初に山下妙子さんが失踪したのが一月八日、それから三十日後の二月七日、二人目の桂美里さんが姿をくらましています」

そのさらに三十日後の三月九日には三人目・川口智美が失踪。
そしてその三十九日後である四月十七日には四人目・加村英子。
次の五人目・伊藤夕葉は四十六日後の六月二日。
そして最後の一人、高野日奈が七十五日後の八月十六日に失踪している。

「このように失踪事件の間隔に注目してみると、“どんどん周期が長くなっていく”ことが分かります」

「それが、何を意味するんだね？」と、尋ねたのは伊戸部老だ。

千鶴はノートの別のページを開いて答えた。

「実は完全に屍蠟ができるまでは三年もの月日がかかります」

屍蠟化が始まるまでは一ヶ月、それが全身に及ぶまでは三カ月、
大体見た目が完成するのが半年後、そこからゆっくりと完全な蠟化
へ移っていく。

ところが最初の事件から三人目の事件までは間が三十日しか空いていない。

「これは、死体が蠟化現象に移行せず、そのまま腐敗してしまった
からだと考えます」

つまり、三十日目において屍蠟作りが失敗したと知った伊戸部は、
そのときに備えて前から目をつけていた他の娘を誘拐して殺害し、
ここに運び込んで屍蠟を一から作り直したのだ。

「……要するに、ここに並べられてあるのは紛れも無く姉さんたちの
遺体なんですね？」

そう聞いたのは姉の屍蠟のそばに立っていた利奈だ。

「その通りです。そして、蠟人形館の地下アトリエに残された蠟人形はただ姿を似せて作られた蠟人形です」

“失踪した六人の村娘の行方”という謎に対する結論に、被害者家族の何人かがうめき声を上げた。それが、家族の死亡が確認された悲しみか、今まで自分たちがしてきたことに対する虚^{むな}しさか、もっともそれを知る術は赤羽には無い。

14 『蠟人形魔術師の末路』

「しかし、よくここを見つけたものだね」

一度、あの広い場所に戻ったところで、赤羽教授が感心したように言った。

その疑問は無理もない。何しろ三十年間誰も見つけ出せなかったこの洞窟を、状況と資料からの推論だけで、宝の地図のような印も無しに土砂の下から見つけ出したのだから。

「それは、条件に合った場所が一箇所だけしかなかったからです」
「条件？」

「ええ、先ほど屍蠟の説明をさせてもらったときにいいましたが、遺体の身体が蠟に変質する現象はごく限られた条件でのみ起こります」

まず、“腐敗菌が繁殖しない環境であること”。蠟化には長い時間がかかるためその間に死体が腐敗してしまえば屍蠟は完成しない。だから密閉されているか、菌が繁殖しないくらいの低音であるなど、死体の腐敗しない状況を作り上げなければならないのだ。

二つ目は“水分”である。肉体が蠟状になるにはいくつかのプロセスがあり、まず生命活動をとめた肉体の脂肪が水分と結合して脂肪酸に分解される。その現象が体の内面へと浸透していく間に、外側から水分と結合して還元され、飽和脂肪酸となる。そうして体が弾力を失い、硬くなった状態が屍蠟なのだ。

このように、肉体が蠟へと変化していく化学反応には水分が必須であるため、屍蠟作りには多分な水分が必要不可欠なのである。

「さらに今回の場合は状況からの条件が加わります」

屍蠟作りは今述べたように、限られた条件で行われ、それを人為的に行うにはかなりの手間がかかると予想される。その本拠地を村から相当離れた場所に作ったのでは、管理、維持もままならない。よって、村、特に蠟人形館からそれほど遠くないところで、目立たず見つかりにくい場所に限られる。

「この白灯村は日陰では少し寒いくらいに低温ですし、ここは十年前までは上を川が流れていて、滝の裏にあつたらしいですしね。その水しぶきで水分も十分。そして場所的にも蠟人形館からさほど遠くない。これだけ条件のそろっている場所は二つとないんですよ」

おそらく、イタリアに留学する前から伊戸部礼二はこの洞窟のことを知っていたのだらう。だから、この村に戻ってきた。自分の目的を達成するためのすべての条件がそろっているこの村に。

「それで、礼二の話はどうなつとる？」

話題が一段落した一瞬の沈黙について発言したのは、伊戸部老だった。息子の所業をこうして次々と暴かれるのはやはり気分がよくないらしく、その表情は自然にしかめられている。

「アンタは居なくなつた娘らの居場所を突き止め、どうなつたかは解き明かした。でも犯人・伊戸部礼二の話は出てきとらん」

「……では、今からお話します。こちらへどうぞ」

伊戸部老の問いに、元々いつもの呑気さが失われていた千鶴の表情の緊張が深くなる。

彼は、この広間から分岐している二つの道のうち、まだ案内して

いなかった右側の道へ入っていく。こちらの道はやや狭く、高さも平均の成人男性の背丈ぎりぎり（長身である千鶴はすこし身をかためなければならなかった）、幅は大人二人分といったところか。

そんなところなので、左の道のように、ランプは設置されておらず、懐中電灯でもって照らして進む。

「伊戸部さん、あれを見てください」と、言って千鶴は持っていた懐中電灯で対象のものを照らし、すぐ後ろにいる伊戸部老に声をかける。

伊戸部老は自分の前から千鶴が退き、視界が開けると、懐中電灯の光を千鶴が指示したほうに向けて照らしてみる。

「…………アレが……か」

それは、最初、人影のように見えたが、懐中電灯の光に目が慣れてみると、それが人であって人でないことがわかる。

大まかに述べると、それは座禅を組んだ体勢だった。足を硬く組むことによって、それが土台となり、うまくバランスが取れて支えがなくなるとも倒れることがない状態になっている。

だが、それは先にも言ったとおり、人型ではあっても人の姿はしていなかった。その体は骨がほとんど露出しており、肉や皮は申し訳程度にしか残っていない。それは、先ほど見た“屍蟻の失敗作”そのものだった。

「あれが、蟬人形魔術事件を引き起こした張本人・伊戸部礼二さんです」

「…………それが何で屍蟻の出来損ないに？」

そのおぞましい光景に息を吞んでいた者の一人が尋ねる。

「それは、こうして自らが屍蠟になることが伊戸さんの最終目的だったからです」

赤羽教授から聞いた、三十年前の話によると、こう言ったという。

『どれほど美しくても年をとればやがて誰もが醜く変わり果ててしまふ。だが、こうして蠟人形にすることで永遠の美しさを手に入れることが出来るのだから』

これによると、伊戸部礼二は老いによつて容姿が醜くなることに対し抵抗を覚えていたらしいことが読み取れる。伊戸部自身も容姿は相当色男であつたことであるし、自分が醜くなっていくのも耐え切れなかつたのだらう。

だからずっと美しさを保つていられる術を求めていた。そうしてたどり着いたのが蠟人形魔術だつたわけである。

「しかしどうやったらそんな答えになる？ 礼二はイタリアで何を見てきたんだ？」

伊戸部老が問うと、千鶴は一枚の資料を取り出してみせた。

「これを見てください」

その資料は写真をカラーコピーしたものだつた。その写真に写っていたのは一人の女兒の寝顔である。外見年齢は二、三歳。柔らかく波打つた茶色の髪に、ピンク色のリボンがとめてある。

だが、明らかに普通の状態ではなかつた。肌は濃いコーヒー色、質感は無機物っぽく、人形のプラスチックの肌のような。女兒の体は棺のようなものに入れられ、その体を赤茶色の布に包まれている。

「それは……？」

「世界で一番美しい死体と呼ばれるもので、“世界一有名な屍蠟”です」

イタリアはカトリックの総本山・ヴァチカンのお膝元とあり、宗教活動が活発で、厳格な信仰生活に身をささげる者達が集った、イエズス会、フランチェスコ会、ドミニコ会などを代表とする修道会も数多い。その中に特に厳格な“カプチン会”と呼ばれる托鉢修道会があった。

その修道会は全会員が“カプツィョ”と呼ばれる先のとがった頭巾、コーヒー色の衣といういでたちが有名なのだが、このカプチン会にはカトリックらしからぬ一風変わった“風習”があった。

「それは、“死体をミイラにして保存する”というものです」

それは、血を抜いて干からびさせたあと、酢で洗い、外に干してさらに乾燥させる。

さらに独特なのが、完成したミイラは生前を思い起こさせる格好で保存されることだ。干からびて細くなった肉体を、わらで巻くなどして補正し、その上に服を着せる。そして、人形を抱いて手招きをする、お辞儀をする、などあたかも生前に行ったようなポーズをとらせているのである。

そのような一風変わった風習を持つ、カプチン会の地下納骨堂には、古代エジプトのそれと比べるとお粗末なミイラ作りの技術のおかげで風化し、ただの白骨と化してしまっているミイラが並んでいるわけであるが、その中で八十年間もの間まったく腐敗し、風化する様子も見せず生前の姿を保っているミイラがある。

「それが、この写真の女の子、“死少女”ロザリア・ロンバルドです」

一九二〇年、ロンバルド將軍の娘であるロザリアはたった二歳でこの世を去った。それを嘆き悲しんだロンバルド將軍はカプチン会の会員でもある医師・サラフィアに遺体の保存を頼んだのである。サラフィアは見事それをやりとげ、ロザリアの遺体は永久にその姿を留め、今日に至る。だが、サラフィアはその遺体の保存方法を全く明かすことなくこの世を去ってしまったため、成功例はこのロザリアの遺体の一例だけだ。

「伊戸部礼二さんが行つたのもイタリア。だとすればパレルモを訪れた可能性は十分にあります。そして、この生前の姿を完璧にとどめる屍蠟に出会ったとしたら」

影響を受ける、という言葉がある。芸術家は、ときに他の作品に胸を打ちのめされ、結果、その心が自分の作品にその技術等を取り込まれる形で反映されるのだ。ロザリア＝ロンバルドの屍蠟という芸術に伊戸部礼二は影響を受け、自らがその芸術になればいいと思った。

だが、ロザリア＝ロンバルドの屍蠟の製法は残されていない為、それを模索する必要があった。やり方はいろいろ研究し、仮説もいくつも立てられたが、実験をしないと成功する確信は得られない。

「その実験こそが三十年前に起こった蠟人形魔術事件の全貌といえるでしょう」

そして、警察に追い詰められたと感じた伊戸部礼二は、蠟人形魔術の完成を見届ける事無く、出来るだけ屍蠟になれる条件を整えた後、ここで命を断つて今に至る、という訳である。

「でも、高野日奈で一度成功したのに、どうしてこっちでは成功し

ていないんだ？」

次に質問をしたのは、この場に同席していた井上である。まだまだ駆け出しの巡査とはいえ、父のこともあり、先ほどの千鶴の説明を事細かにメモに書き留めていた。

確かに、高野日奈は“二体目のロザリア”ロンバルド”として、その形をとどめるにいたっている。だが、その後に死んだはずの伊戸部礼二自身は自分の屍蠟化には成功していない。

「まぐれだったってことか？」

「確かに高野日奈さんの屍蠟だけ偶然成功したということは考えられますが、伊戸部礼二さん自身の屍蠟については失敗する要素はいくつも考えられます」

「いくつも？」

意外そうに、井上が聞き返すと、千鶴はうなずいて答えた。

「そう、たとえば“脂肪分不足”」

先ほど述べたとおり、人間の肉体が蠟に変化するための第一の条件は低温度と高湿度である。だが、そのほかにも屍蠟ができるための条件はある。

たとえば“材料”である。人間の肉体が蠟に変化するメカニズムについて、遺体が腐敗せず、水分が多く存在する状態にあるばあい、人体の脂肪分がその水分と結合し、化学反応を起こして蠟に変化するということは先に述べたとおりだが、今述べたことといえることは屍蠟が完成するための“材料”は水分のほかに脂肪が必要なのである。

蠟人形魔術の犠牲者は女性ばかりだが、これはなにも伊戸部礼二

の趣味というだけではない。これは女性のほうが総じて体脂肪率が高いため、屍蠟化が成功する可能性が高かったためであろう。

特に、井上の父が作った資料によると伊戸部礼二は痩せ型の男であつたというのであるから、脂肪分不足は彼が屍蠟化するのには厚い壁であつたわけだ。

「もうひとつが、“薬品を使えなかつたこと”」

ロザリア＝ロンバルドの遺体を屍蠟化させた医師・サラフィアは結局、その方法を明かさずにこの世を去ってしまった。だが、いくつかその要素が解明されているのだが、その一つが何らかの薬品を遺体に使つたのではないかということである。

ミイラ作りの本家・エジプトでもミイラを作る際には血を抜き、防腐処理などのために高級な薬に遺体を漬ける。そのために、ミイラを粉にしたものはよい薬になると信じられ、盗掘の原因の一端となつたのであるが。

「ちょっと待て。でも伊戸部礼二は元から自殺をするつもりだつたんだろ？ 自分の死体を薬漬けにするなんてことはできなかったんじゃないかねえのか？」

「そこです」

いい質問だ、とばかりに千鶴は質問をした井上を指差した。

「自分を屍蠟化させるためには、死んだ後は全く手を加えなくてもきちんと遺体に変化するようになければならなかつたんです。だから“彼は生前から薬品処理する方法をとつた”」

「え？」

「思い出しませんか？ この事件に関連して、とある“薬”が出てきたことを」

はじめは何を言っているか分からない様子だったその場の面々であるが、その一言で皆合点がいったのか、いつせいに声を上げる。

「あつ、“麻薬”！？」

「その通り、麻薬です」

これは完全に千鶴の憶測でしかないが、伊戸部礼二が誘拐する前の娘に麻薬を用いていたのは生前から体質を変化させ、死亡後、特に何もしなくても屍蠟化が進むようにする目的であったとみている。よく麻薬中毒の人間をクスリ漬けと言うが、実際に血管などを通して、体中に浸透させるにはそれが最良であっただろう。

「いろいろやりやすくなるように娘を手懐けるためじゃなかったのか」

「その目的もあったと思いますよ。実際、麻薬としての効果はあったわけです」

伊戸部礼二にとって、自分の死はまだ先のことだった。だから、麻薬などで頭の働きを鈍らせるわけにもいかず、高野日奈の件で麻薬のことが警察に嗅ぎ付けられ、追い詰められて仕方なく命を断った時点では前処理が終わっていなかったのだ。

こうして伊戸部礼二は志半ばにして、この世を去るが、彼の最後の作品である高野日奈は見事にその姿をこの世に留め、彼の成果として実を結ぶ。

しかしこの悲劇が最後に生んだ皮肉か、長らく望んでいた蠟人形魔術の完成を、その術者はついに目にすることはなかったのである。

14 『蠟人形魔術師の末路』（後書き）

参考サイト：

『ロザリア・ロンバルド／見る人を惹きつけてやまない死少女』

<http://www.nazoo.org/phenomena/rosalia.htm>

15 『隠された真実』

日が暮れて、訪れた夜に鈴虫が夏を歌う。

静かな祭囃子まつしやしを奏でる篠笛しのぶえが、その声を縫うように柔らかい旋律を奏で、それにあわせて踊るように人々の中心にある大篝火おおかがりひの炎が揺らめいている。

人々はその炎に先祖の魂を宿し、盆を共にすごした灯籠を次々とその炎の中へ投げ入れてゆく。

毎年、お盆にあわせて催される白灯祭。三日間に渡って続けられる。先祖の魂を宿した灯籠をもって村を回る燈籠巡りがはじめの二日に行われる。

そして今、村の広場を利用して行われているのが、大きな炎によって灯籠を燃やして、白灯祭りの締めくくりとして再び先祖の魂が黄泉よみの国に帰るのを見送る“灯籠送り”である。

見送りという形の儀式なので、それほど盛り上がる行事ではないのだが、今年の“灯籠送り”は殊更ことさらに厳おごそかに執り行われていた。

今年は先祖に加え、三十年前に起こった事件で命を落とした六人の村娘を送ることになったからだ。

千鶴が蛾人形魔術事件の真相を明かしたあと、彼らは見つかった遺体をどうするかについて話し合った。

結果、ちょうど、今日は灯籠送りで先祖と一緒に黄泉の国に帰るのだから、ついでに彼女らの魂も連れて行ってもらおう、ということになった。

さすがにただの篝火で遺体を焼くのは憚はげられるので後日きちんと茶毘だひに付すとして、今日は遺髪の一部を切り取って、灯籠を燃やす大篝火に投げ入れるのである。

つい先ほど解き明かされた奇怪な事件はセンサーシヨナルであり、

また、殺された六人に見ればこの事件は悲劇としか言いようがない状況であるため、成仏を願う村人たちの祈りはその分真摯なものだ。

赤羽も高野日奈の遺髪を手に篝火の前に立っていた。

恋人の髪を最後に触ったのはいつだろうか。あの頃は何気なく触れていたが、三十年経った今、再び触れることになるうとは。感触はあまり思い出せないが、それでもその存在を通して、日奈とすごした日々、交わした言葉が次々と脳裏をよぎる。

信じることができなかった。

守りきることができなかった。

幼馴染との恋の果てに、彼の心に残ったのは悔いと喪失感だけだ。（だが、それも今日までだ）

あの蠟人形魔術事件は今日をもって終わりを告げたのだから、もう“少なくとも彼女の死だけは”引きずることはない。

赤羽が篝火の前に一歩進み出て、手の中の遺髪を炎の中に滑り込ませようとすると、横から手が伸びてそれをとめた。

「待って、オジサマ」

ほっそりとした手の先から目で追ってゆくと、日奈に似た顔立ちの少女を認める。——雛子だった。

隣には千鶴も立っている。

「日奈さんとお別れをされる前に、是非聞いていただきたいことがあります」

人の輪から外れ、篝火の光がやっと届くところまで来ると、赤羽は口を開いた。

「わざわざ私を皆から離れたということは、“あのこと”に気がついていたんだね？」

「はい、皆さんにはお話しませんでしたけど、どうしても教授だけに聞いてもらいたかったんです」

千鶴が皆に話した内容は、蠟人形魔術事件のすべてではない。一部ではあるが重要な事実を抜かしたものだ。

蠟人形館の伊戸部礼二の部屋で見たもの——屍蠟とはまったく異なり、魔術書などを揃え、世にも奇妙な書体で書かれたノートを残してこの事件をより魔術的なものに演出した偽装工作である。

千鶴は、単刀直入に尋ねた。

「あの偽装工作をしたのは教授ですね？」

根拠のない憶測ではなかった。

まず、偽装で施された蠟人形魔術が、本当の蠟人形魔術である屍蠟作りの実態とはまったく違ったものであること。また、井上巡査の父が書いたノートには伊戸部礼二の部屋を捜査した記述もあり、そこには魔術的な書物のことについては触れられていなかった。他の書物のことについては述べられ、しかも本人が“蠟人形魔術失踪事件”と呼んで、この事件の魔術的演出に目を向けていたのにもかかわらず、である。

つまり、状況的に事件直後はこの偽装はなされていなかったということだ。しかもそのときにはすでに伊戸部礼二は死亡しているため、偽装工作を行った人間は伊戸部礼二ではありえない。

「では、誰がしたのか？　という話になると、それほど難しくない」

偽装工作、と一言でくくれる作業であるが、じつはあれほど大掛かりに魔術の研究をしていた、という状況を作り上げることは簡単なことではない。

まずあれらの本を揃えることが難しい。何気なく並べられていた本であるが、あれはドイツ語で書かれたものであり、いかにも魔術書らしい本の造りや、とてもまともに見えない内容からして稀覯本きこうほんくさい。とてもそこらの古本屋に転がっているものではないだろう。

「教授は民俗学を専攻していますが、とくにドイツの民俗には詳しく、かつたし、ドイツ語も使えたはずです。そして確たる証拠が、あの研究ノートですよ」

内容的にいかにも研究したらしい走り書きがたくさん走っていた。あれほど見事に“研究したあと”に見せかけるのは素人には難しい。“普段、研究をしている人でない限り”。

そして千鶴にとって決定的だったのがあの奇妙な文字である。いかにも気の狂った人間が書きそうなばらつき、ゆがんだ文字列であったが、千鶴はその文字に心当たりがあった。

「……教授は色覚障害を持っている」

赤羽は、普段ものを書くのに赤いペンを使い“赤ペン先生”と呼ばれている。これは一種の色覚障害で普通の黒ペンがあまりよく見えず、逆に赤がよく見えるという症状のためだ。

今でこそ数え切れないほど本を読んで黒い文字にもなれ、訓練をしてきれいな字を書けるようにはなったが、昔は本を読みたくても読みにくいジレンマで大きなストレスに悩まされ、字が汚いことが周囲からの人格否定につながり、大変な苦勞を負ったと聞いている。

「そんな状態で字を書くと、こんな風に不揃いになる可能性は高い」

赤羽はまったく答えないが、異を唱えないところを見ると、千鶴の話に間違いはないらしい。雛子は、少しは否定してもらいたい気持ちもあったが、今まで立ててきた推論が崩れずにすんだことに安堵もしており、心中は実に複雑である。

「そしてこの偽装工作はある一つの事実を示しています」千鶴は、人差し指を立てると、少し間をおいて告げた。「――伊戸部礼二は自殺じゃない、赤羽教授、あなたが殺したんです」

なぜ、赤羽は偽装工作を行ったのか、それを考えて出した結論がこの“赤羽教授による伊戸部礼二の殺害”である。

この事実は先ほどまでは推論でしかなかったが、伊戸部礼二の遺体を目にすることで確証を得た。

「自殺であるならば死体はあそこから動けないはず。それでも、伊戸部礼二が自殺に使ったものと思われる道具はどこにも見つからなかった」

手首や頸動脈を切ったならばナイフやカッターがそばに落ちているだろう、毒を使ったのならば、その苦しみの中で座禅を組んだ体勢になるのは難しいだろう。ほかに目立った外傷もない、ということとは、伊戸部礼二は第三者に殺された可能性が高いのである。

そして、他殺と見てしまえば、一番最後に彼を目撃した人物、恋人を殺されたという動機を持っている人物、つまり赤羽が加害者という構図が出てくるのにさほど苦労はない。

「教授……あなたは、本当は全部知っていたんでしょう？ 失踪した村娘がどうなったのかも、あの洞窟のことも」

当人は、「怖くなってその場から逃げた」と、言っていたが、他の村人ならともかく、当時珍しくも村の外に出て真剣に学問を修めていた理知的な当時の赤羽青年である、いくらそっくりの蠟人形を並べられても、それが恋人自身であるといわれて納得できるはずがない。

千鶴の推測によると、赤羽は一度蠟人形館から出たあと、伊戸部礼二が出てくるのを待ち伏せた。一人になれば必ず六人の村娘を隠している場所に向かうと考えたのであるが、それが見事に当たり、出てきた伊戸部礼二のあとを尾行することであの洞窟の存在を知ることになる。

そして、洞窟内で日奈やほかの被害者たちの遺体を発見、そして再び伊戸部礼二と対峙、もしくはひそかに忍び寄り、伊戸部礼二を何らかの方法で殺害した。

「なぜなら、最後の被害者である高野日奈と、伊戸部礼二の失踪が同日であることから、伊戸部礼二が死んだのはこの日、あの洞窟であると考えられるからです」

つまり“伊戸部礼二を殺害した者はこの日のうちにあの洞窟のことを知ったことになる”のである。

千鶴のように、何もない状態から、推測などから得た条件などを当てはめて場所を割り出す方法は一日で発見するには非効率だ。だとすれば、当時取れた方法で、あの洞窟を発見するのに一番いいものは伊戸部礼二を尾行することである。

あとは、同じく息子の所業に戸惑っている伊戸部老に会いに行き、伊戸部礼二が蠟人形魔術を研究していたといい、それによって蠟人形になってしまった娘たちを元に戻すために蠟人還しを催すように言った。

そして、捜査の目が一段落した後、捜査の間に集めた本や、書き上げたノートで伊戸部礼二の部屋を偽装工作したのである。

「一昨日の夜、どうしてあまり調査するのに賛成でないのに協力してくれるのか、と教授に聞いたときに、あなたは『知られるのは怖い、それでも知ってほしい』と言っていました。」

犯した殺人の罪と、偽装工作でだました罪——知られるのは怖いけれども、だれかにこの罪を知ってほしい、話すのは怖い、誰かに知ってほしい、そういう意味合いだったのではないかと僕は考えました」

千鶴は、そう言つて、長い口述を締めくくる。あとは、それが合っているのかどうか、赤羽の答えを待つばかりだ。

雛子と千鶴、二人の視線が注がれる中、赤羽はふつとやわらかく微笑み、ゆつくりと拍手をした。

「満点だよ、青山君。何もかも君の言つたとおりだ。私が伊戸部礼二を殺したのだよ」

「オジサマ……」

慕う者が殺人罪を認めたことで、雛子の表情がこわばる。覚悟はしていたとはいえ、やはり現実認められると心に与えられる衝撃は小さくない。

「何で……偽装工作なんかしたの？」

事件が起こつたのは赤羽が原因ではないし、赤羽が伊戸部礼二を殺してしまったのも気持ちも分からないでもない。だが、これだけかわからない、どうしてわざわざ事件を魔術的に演出したのか。

千鶴の推理どおり、六人の遺体や、伊戸部礼二の居場所を突き止めたのならそれそのまま警察に言えばいい。そうすれば、こん

なにも長い間、無駄な希望を抱いて、蠟人還しのような狂気に満ちた真似を遺族にさせることもなかっただろうに。

「あの人たちは三十年間、あの蠟人形になつてしまった人たちが元に戻るつて信じてたのに……それが嘘だつて知つてたのね」

それどころか、その嘘を作り上げた張本人が、赤羽なのだ。

「……弁解をさせてもらえれば、その嘘にだまされた人たちをあざ笑つていたわけではない。ただ、信じてやれなかった。守つてやれなかった。私が日奈に対してできることは“忘れさせない”ことだった」

「忘れさせないこと？」

雛子が聞き返すと、赤羽はうなずいて続けた。

「彼女が死んでしまった、という事実は私にとって受け入れがたいことだった。でも見てしまったからには否定はできない。だから考え方を逆にした」

すなわち、見ていなければ、死んだとは言えない。

高野日奈の死を見てしまった自分はもう仕方がない。だったら、他の人々からだけでも隠し通せば、彼女及び他の村娘たちは生きているという希望が残ることになる。

だが、それだけでは弱い。ただ行方不明になるだけではすぐに忘れ去られ、生きていたとしてもその存在を失つてしまう。だから、できるだけ鮮烈に人々の記憶に残る形にしたい。

そこで、赤羽は伊戸部礼二自身が語つていた蠟人形にしてやった、という表現を思い出した。本人は冗談のつもりだったのだろうが、丁度生き写しのような蠟人形も作られていたので、それを利用して

蠟人形魔術という、忘れようにも忘れがたい奇怪な演出を作り上げたのである。

「伊戸部さんには悪いことをしたよ。自分の息子の罪を償うためだと、協力をさせた部分があったからね。私は彼の息子を殺したというのに」

伊戸部老は、息子の罪を否定したがっていた。それは千鶴が調査の段階で「伊戸部礼二に罪はないかもしれない」という文句を使って調査に協力をさせたことでも明らかである。

それを赤羽も感じ取って、利用したのであるうか。

だが確かに、そうして被害者の家族たちに付き合うことで、加害者の父としてのそしりを免れた部分もあったのであるが。

「だが、その嘘を作り上げたことを、すぐに後悔することになった」

初めて心に引っかけかりを覚えたのが最初に蠟人還しの儀式を行ったとき。その前までは、その“魔術の呪文”を考えるなどをしてすごし、バレたりしないかどうか、緊張をしていたのだが、開始後十分も過ぎると、心が締め付けられる思いがした。

被害者家族たちの祈りがあまりにも真摯すぎたから。

本当にあのただの蠟人形が娘自身だと、姉自身だと思っている。そして祈れば必ず生き返ると信じているのだ。

「よほど、その場ですべてを打ち明けたかった。……だができなかった——怖かったのもある。人の死において、彼らの心を弄^{もてあそ}んだのだから。だがそれよりも、彼らの抱く希望はあまりにも強かった」

ここまで真剣に儀式に参加してもらえとは思えなかった。外の

大学で科学的な思考を身に付けたからだろうか、ここまで純粋な信心を予想していなかったのである。

「簡単に言えば、引つ込みがなくなっただよ」

赤羽は彼らの思いに対して、自分は自分の作った嘘を否定してはならないと考えた。この事件の幕を引くのは自分以外の者でなければならぬのだ。

だが、それも難しい話だった。あまり大きくは取り扱われなかったが、奇怪な事件として社会面に載せられたこの事件のミステリーに興味を抱いた者たちがいなかったわけではない。

しかし、大抵は興味半分で蠅人形館を一瞥し、すこし村人に話を聞いて回っただけでほとんど冷やかしのままに帰ってしまっていた。そして十年前、決定的な証拠となる、あの洞窟の崖が崩れた事件で、赤羽は、もう事件は説明されないとほぼ完全に諦めたものである。

だが、三十年目にしてその謎を解き明かす者がとうとう現れた。

六人の村娘の行方も、自分の侵した罪もすべて解き明かして見せたのは、何の因果か大学における自分の教え子だったとは運命は皮肉に満ちている。

否、それは解き明かして欲しいと願う自分が育てた教え子なのだから、至極自然な流れだったのかもしれない。

それはそれとして、赤羽は一つ疑問が湧き起こっていた。

「なぜ私のしたことを彼らに公表しなかったのかね？」

赤羽は、自分では罪を告白しなかったが、もし真実を解き明かすものが現れた場合、その真実をどう扱うかは全てその者に任せようと決めていた。その結果、自分がどうなってもかまわない、と。

「それを決めたのは僕じゃないです」と、千鶴は答え、雛子に視線を送る。

「雛子君が？」

「あ、青山……さんが、自分は真実を解き明かすけど、それをどうするかは私に決めてほしいって」

雛子の千鶴に対する呼称はいつも二人称の“アンタ”だったため、名前を呼ぶのを少し戸惑ったようであるが、それ以上はよどみなく答えた。

「……私はもうこれ以上この事件に幕を下ろそうと思ったんです。皆に真実を知らせて、あとは何も残さないようにしようって」

だが、赤羽のしたことを公表していれば、彼はただではすまないだろう。三十年間、人の生き死にに関係して嘘をつき続け、被害者家族たちの心を弄んでいたのだ。例えば恋人が亡くなった当時の行動でも簡単に許せるものではない。

「だから、オジサマのしたことは皆には黙っていようと思ったの。村の人たち、みんないい人よ。オジサマもいい人。だからその事件のことだけでオジサマを嫌ってほしくなかった」

いまさら赤羽を憎んでも、被害者家族をはじめとした村人達に何もいいことはない。あの事件の悲しさを引きずるだけだ、と雛子は考えたのである。

「僕も三沢さんの意見には賛成でした。公表して悪い結果になると予想されるなら、例え真実でも知らされるべきものじゃない」

「……では、君は私がしたことに対してどう思う？」

赤羽がさらに尋ねた質問に、千鶴はしばらく考えて答えた。

「死んでしまった人のために何かをしてあげようとか、忘れないでいてあげよう、という気持ちも大切だと思います。……でも、形はよくなかったと思います」

死者に対してしてやれることは限られている。忘れないこと、その死に意味を持たせることはその最たるものであるが、それは死者が生きてきた証、存在を現世に残そうということだ。

だが、赤羽がみんなに忘れさせないために偽装工作を行ったとしても、それはすでに死んでいる者に対して、生きているという希望を抱かせるだけの、死者にとっては意味のない形だった。

「結果として、被害者のご家族も不自然に心を縛られてしまいました」

千鶴は、根拠も乏しい中での蠟人形こそが本人であると信じ続け、その可能性に縋^{すが}って蠟人還しを繰り返していた被害者家族の希望を“呪縛”だと表現した。

「その呪縛に縛られるのは残されたものだけではありません。意味のない希望に縋^{すが}るような形で、ずっと心の中に留められる死者もかわいそうだと思います」

その答えを聞いて、赤羽は満足そうに微笑んでうなずいた。

「ああ、その通りだ……。それに気付けなかった私は愚かだったよ」

改めて灯籠送りの大篝火の前に立つ。不思議なことに先ほどと比

べると明らかに澄んだ気持ちでここに立っている。悔いてはいるが、気持ちは過去よりもこれからのことに向いている。

（青山君たちのおかげだな……）

全てを知っていた赤羽は、他の被害者家族とは違い、彼らの心を縛っていた希望は持っていなかった。

それでも、彼の呪縛は人一倍強かった。適わないと知っているからこそ、願いは強くなるものなのかもしれない。そして、まやかしの希望を作り出した罪も、彼の心を強く絞め付けていた。

だが、それ以上に――

（私が、君たちを縛り付けていたんだ）

千鶴が言ったように、忘れさせないように、と作り出した希望は意味のないものだった。

死者の立場になって考えてみると、長い間忘れられなくても死んでしまっているのに、生きることを願われても迷惑に違いない。それよりもいつか忘れられるにしろ、自分の死を受け入れて供養をしてくれたほうが数倍でした。

いくら忘れないためとはいえ、このように無理に記憶にとどめても、本当に死者を想うことなどではしない。

自分が大切だと思える人に、自分を大切に思ってくれる人の心の片隅にいればいい。いつも想われていなくても、時々思い出してくれればそれでいい。

自分が死んだときのことを考えると、そう思えるようになった。忘れてほしくないとは言え、死んだ身であまりに残した人を縛りすぎるのも忍びない。

（私が愚かだったよ、日奈。利奈さんも雛子君も、もちろん私も生きている限り君を忘れることはないだろう）

三十年の月日を経て、ようやくみんな彼女らの死を受け入れた。もう何者も縛られることはない。縛らなくても、大切な者同士、繋ぐ絆は消えたりしない。

「済まなかった。これからはお互いに自由になろう」

手の平に乗せていた遺髪を炎の中に滑り込ませると、一瞬、明るい炎がそれを包み、あっという間に炎が生み出す上昇気流にのみこまれてしまった。

ぱち、ぱち、と大篝火の組み木が鳴り、火の粉が炎の周りを踊りながら天へと昇っていく。伝承によると、その火の粉が黄泉の国へ帰ってゆく魂の姿なのだそうだが、もしその通りだとしたら安心できる。

風のままに踊る火の粉の姿は、見る限りとても奔放で自由だ。

16『そして呪縛は融け失せる』

「これから、何か変わるのかな？」

煌々^{くわくわく}と燃える篝火^{かがりび}の前で祈りを捧げる赤羽教授の姿を隣で遠目に見ていた雛子が千鶴に尋ねた。

「それは生きている人たち次第じゃないかなー」

三十年以上、この村に影を落としていた事件の幕が下ろされるのだ。特に遺族の人々にとっては決して小さくはない転機だろう。

だが、事態が悪いほうに転がるも、良いほうに転がるも全ては生きている者たち次第、つまりは雛子たちに委ねられるということになる。それが生きている者達の責任というものだろう。

「……アンタ、じゃない。あ、青山さん」

「千鶴でいいよ、何？」

「じゃあ……千鶴。千鶴、しゃべり方が元に戻ってるなー、と思つて」

先ほどから少し会話しているが、赤羽教授と離れてから、千鶴の口調は元の間延びしたものに戻っている。

「ああ、もう役目も終えたカンジだしー」

真相は解明し、伝えるべき形をとってその結果を残した。あとの変化については村内の問題なので、千鶴が手を出すことはないだろう。

雛子は、ふう、と大きく息を付いていった。

「……何か、今聞くと何かホツとするわ。千鶴が早口で喋ってるときって大変なときだから、元に戻ると気を抜いていいんだな、って」「真似してみるー？ 楽になるよー？」

「それは……遠慮しとくわ。ところでこれからどうするの？」

「今晚は夜も遅いため泊まることになるのだろうが、もう明日以降は千鶴にはすることがない。だとすれば、

「うん、明日帰るよー。お世話になりましたー」

「……来てよかった？」

好奇心とはいえ、尊敬する教授について知りたくないことも知ってしまったこともあり、後悔しているとも考えたのだろうか。そう尋ねる雛子の態度は妙に心配そうだ。

だが、ほぼ即答に近い形で、千鶴は力強くうなずいて答えた。

「うん、すごく考えさせられることが多かったからねー。勉強になったよー」

愛や夢、狂気に後悔、今まで見たこともないような感情がたくさん見られる事件だった。

また、真実を知ることとは、それだけの責任を伴う。今回の事件の真相は取り扱い次第で更なる悲劇を呼んだ可能性もある。それだけに、一見すらすと述べられた千鶴の推理であるが、その裏で大きな緊張を感じていたのである。ただ、知ったこと、真実を並べるだけでは、人は幸せになれるとは限らないということを実証できた出来事だった。

「ここに来たこと、この先後悔は絶対にしないと思うなー」

「そっか……」

千鶴の答えに雛子は頷くと、そのまましばらく考え込むようにうつむき、やがて納得したように大きくうなずいて言った。

「よし、決めた！」

「何をー？」

「私ね、実は進学するか就職するかで迷ってたのよ」

進学するとたぶん下宿になって親に負担かけることになるし、就職しようか、と雛子は考えていたのだが、赤羽教授や千鶴を見ていて考えが変わった。

今回のことで世界の広さと深さを垣間見た気がする。大学で、それら網羅できるわけではない。知識を自分のものにするには、きちんと学問を修め、まず考え方を学ぶ必要がある。

「今は父さんと母さんに苦勞をかけることになるかもしれないけど、そのほうがきつと後悔はしなくてすむわ」

「いいことだと思うよー。きつとお父さんもお母さんも応援してくれるんじゃないかなー。受けるのってウチの大学ー？」

「当然でしょ。オジサマの講義を受けるのが私の夢だったんだから！」

高らかに不純な動機で受験大学を決めることを宣言する雛子、その横を不意に顔を蒼白にした男が駆け抜けていった。

「……何かあったのかなー？」

「行って聞いてみましょう」

二人で頷き合うと、男のあとを追っていく。

男は皆の集まっている篝火のそばまでやってくると、息切れもあ
いまって、混乱も露あらわに口を開く。

「ろ、蠟人形館が！ 蠟人形館が……！」

先ほどまでは村を代表する木造建築であつた白灯村蠟人形館は、
大きな火柱に飲み込まれ、暗い闇を広い範囲で照らし出していた。

「よう、お前らか」

現場にたどり着いた千鶴と雛子を向かえたのは井上巡査だ。彼は
昼間、洞窟を掘り出したときと同じく、若い男たちを動員して、消
火活動にあたっている。

「どうしてこんなことになってるの？」

息を整える間も待たず、雛子が尋ねると、井上は珍しくため息を
付いて答えた。

「今時分、この辺に火の気はねえはずだ。おそらく放火だろう。多
分やったのは伊戸部のじいさんだ」

伊戸部老は、灯籠送りには参加していなかった。「罪を犯した息
子などと共に送られてはみんなも適わんだろ」と言い、彼は息子の
遺体を一度蠟人形館の中に運ばせたまま、外に出てきてはいない。

「それで、伊戸部さんは！？」

「中に入ったまま出てきやしねえ。自分の息子の死体と館もろとも
心中する気じゃねえかって、みんな言ってるけどな。何にしろ、も
う蠟人形館の全焼は止められねえよ」

吐き捨てるような井上の言葉を受けて、千鶴は燃え盛る炎の中の洋館を見遣った。

完全に炎に包まれた洋館はもはや消火の手を付けられない。できることはといえば、周囲の草木を取り除き、水を撒いて延焼を防ぐことくらいだ。

全てが融け失せていく。

地下アトリエの六体の現し身、

二階の芸術的な作品群、

伊戸部礼二の部屋に赤羽教授が作り上げた嘘、

老いた蠟人形職人、

そして、その息子である蠟人形魔術師。

広場で焚かれた柔らかな篝火とはまったく質の異なる、まるで全てを根こそぎ持っていつてしまう洪水のような炎は、蠟人形魔術の全てを飲み込み、洗い流していく。

思えば長い悪夢のような事件だった。

たった一人の男が屍蠟と出会い、それを実践しようとして六人の娘が犠牲になった。

その悲しみから、六人目の娘の恋人はその男を殺して希望という嘘を作った。

以後、三十年。犠牲者も、その家族も、関わった者たちは皆ずつとこの事件の呪縛に捕らわれ続けていた。

だが、今日でそれも終わりだ。

六人の村娘の死は受け入れられ、今日、先祖たちと一緒に黄泉の国へと去っていった。

嘘を作った六人目の娘の恋人も、心の整理をつけた。

そして、全ての始まりであつた蠟人形館が全てを抱いて消失していく。

全てを燃やしつくし、全てを洗い流し、蠟を融かしきつた蠟燭のように、この炎が悲しみを融かしきって消えたとき――

蠟人形魔術は真にこの世から消え、人は、呪縛から解き放たれる。

（呪縛の蠟・完）

あとがき＋捕捉＋広報

この作品『呪縛の蠟』は、元々は大学生のとき、サークルの文芸誌に掲載するために書き下ろしたものです。

文芸誌自体は実現しなかったのですが、Webに一旦掲載してました。世間的にはそれが初出です。

それから、僕のやっているサークルの文芸誌『コトダマ』に掲載し、今回「小説家になろう」に投稿するために文章を加工（改行を増やしたり）したものです。

何という再利用感（笑）。それでも誤字脱字はあったのですから商業用の本の校正をしている方には頭が下がりますね。

でも読みやすいように、各章にタイトルをつけたのは今回が初めてです。

■お題について■

今回は、少々縛りがありまして、キーワードとして【お前も蠟人形にしてやろうか？（台詞）】【赤ペン先生】、そして条件として【男キャラ2名以上出すこと】というものがありました。

男キャラ2名というのが実はやおいねらいで、頭に「美形の」がつくらしかったのですが、一応若いころの赤羽教授と伊戸部礼二は美形という脳内設定があるので、まあ良しとします。

「お前も蠟人形にしてやろうか？」というデーモン小暮閣下の名台詞は赤羽教授が回想で出てきましたね。この台詞をそのまま利用して「蠟人形魔術」というこの小説の根幹を成すモノができたのですよ。

「赤ペン先生」の使い方はかなり秀逸だったと思います。前編だけ見ると、赤羽教授のあだ名というだけなのですが、後編の謎解きではこの言葉がかなり重要なヒントとなるのが分かるはずです。

色覚障害については、いろいろな症例があるそうですが、赤羽教授のパターンは創作ということでご理解ください。

■ キャラについて ■

いつもキャラクターについては地味になりがちなことを自覚していた僕は、この作品では少しキャラクターの造成に気を使いました。本来主人公・千鶴からして特殊語尾使用。語尾を延ばすほにゃらしたキャラにしてみました。

そして微妙に便利に使わせてもらったヒロイン・雛子はいかにもトロそうな主人公にはツンツン（後に微妙に変化）して、真摯な赤羽教授にはデレデレするという設定にしたつもりなのですが、肝心の赤羽教授との絡みがなかなか成立せずに終わっちゃいました。（つか、今見てみたら雛子がオジサマに話しかけてる場面、二つしかないよ！）

それでも千鶴とのからみでだんだん千鶴の見方が変わっていく過程は書いてる僕も楽しかったです。

ですが、今回光ったのは脇役ですな。

コードネーム『ガキ大将デカ』井上巡査、とか。

コードネーム『実は隠れ親バカ』三沢芳雄（雛子の父親）とか。

特に井上の出てくる場面は書いてとても楽しかったです。

■怪奇ミステリーというジャンルについて ■

蠟人形というギミックが先にたったこともあり、いろいろ触発されるものがあって怪奇ミステリーに挑戦いたしました。

もどきでも一応ミステリーの形にしたつもりですが、なかなかストレスがたまりますね、これ。「言いたいんだけど、まだ言えない」みたいな（笑）。

でもあまり最後までわけの分らないまま引きずるのもアレなので考察を主にやっていた中編では時々ヒントっぽい事実や、伏線も張ったりしましたし、千鶴たちが考察を述べる場面では、「どこまで書いたらいいのか」とか非常に気を使いながら書きました。

ま、短編ミステリーなんでちやちいモノですが、とっておきだったのが、「なぜ伊戸部礼二はあのような犯行に至ったのか」「だれが伊戸部礼二の部屋の偽装工作を行ったのか」の2点ですね。

「失踪した六人の村娘の行方」に関しては、大体想像のついた方も多いんじゃないかと思います。

謎解きの場面、「やっと喋れる〜！」と、私は気持ちよく書かせていただいたのですが、読者のみなさんはご理解いただけただけでしょうか？ それだけが心配です。

【その他参考文献】

「中村のきまぐれ法医学」

URL: <http://www.kachho.ne.jp/hobby/legal-med.htm>

「屍蠟 (Wikipedia)」

URL: <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%AD%BB%E8%9D%8B>

「一度見たら忘れられないミイラ・ロザリア・ロンバルド」

URL: <http://www.nazoo.org/phénomena/rosalia.htm>

■エピソードについて ■

僕は今まで、どの作品にもキャラクターが作中で見せていた迷いに答えを出し、後日談等、明るい“これから”をおわせるエピソードを必ずつけてきたのですが、今回はその前に片付いてしまったので、あえてあそこで終わらせていただきました。

かなり最終段階まで翌年4月に雛子が千鶴の大学に進学してきて、挨拶がてらに後日談を語る場面をプロットの中に入れていたのですが、何か書きたかったことが全部その前に持ってきてしまったために消滅してしまったのでした。

■ロザリア・ロンバルドについての捕捉 ■

本作で「最も美しい死蝋」として取り上げたロザリア・ロンバルド（写真下）ですが、執筆当時は本文に書かれたとおり、本当に遺体の保存方法は長年謎のままでした。

しかし最近の調査によって、一昨年の十二月にその方法が明らかにされたことが、ナショナルジオグラフィックの記事になっていました。

記事では、ホルマリンで防腐処理を行い、アルコールで遺体を乾燥させミイラ化させつつ、グリセリンで乾燥しすぎるのを防ぎます。そしてサルチル酸で腐敗菌の繁殖を防ぎ、最後に亜鉛酸で遺体を石

のように硬化させた、とあります。

ロザリアの遺体が最も完璧に保存されているのは、最後の亜鉛酸によるところが大きいらしいですね。

ホルマリンは防腐処理においては、今では常識の薬品ですが、サラフィアは、遺体の防腐処理にホルマリンを使った最初期の人間の一人のようです。

ロザリアの父親がサラフィアに遺体の保存を頼んだのは、ここまですべて完成された保存技術を持っていたからだと思うのです。つまり、サラフィアはロザリア以前にも完璧な防腐処理を施した遺体を作った実績がある、と考えられます。

つまり、世界のどこかには、公開されていないだけで、第二、第三のロザリア＝ロンバルドの遺体が存在するのではないかと、僕は考えています。

【参照サイト】

「ナショナルジオグラフィック “眠れる美少女”の謎が明らかに」
http://www.nationalgeographic.co.jp/news/news_article.php?file_id=2009012701&expand

■最後に■

8月21日に大阪府のインテックス大阪で開催される『SUPER COMIC CITY 関西 17』に新刊として出す『コトダマ』第2号に続編となる『惑わせ狸』が掲載されています。

他の小説も合わせて一冊300円。通販も行つ予定ですし、11月に東京で開催される『文学フリマ』にも持参する予定なので、是非是非お求めくださいね！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0404u/>

呪縛の蠟

2011年8月15日09時50分発行